
GOD OF DESIRE

天川充

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G O D O F D E S I R E

【Nコード】

N 8 6 6 2 I

【作者名】

天川 充

【あらすじ】

好きな女の子に告白するも振られ、その腹いせに先生を殴り停学までくらったひとりの男子高校生・斉藤猛。頼れる仲間が幼馴染の前川吹雪と葉山洋平、太田衛、上村翔太たちのみ。

何もかもうまく行かない主人公たちの前に突如現れる謎の女性。彼女は主人公の手を握り、その場を立ち去ってしまう。

その数時間後、主人公が神頼みをするとなんが現実のものとなってしまう。やくざにからまれた猛たちが、掌から光を発すると、目の前にかくざたちは倒れていたのだ。最初は信じられない猛だったが、

その後何度か同じことをするたびに願いが現実のものとなることに気付く。それをいいことに悪用していると、再び謎の女性が主人公の前に現れる。彼女は隣の大学に通う女子大生だったのだ。

そして、主人公に与えられた不思議な力の正体がわかる。『GOD OF DESIRE』と呼ばれる力で彼女は世界を誰もが幸せになれる世界を創ろうと持ちかける。

彼女とともに警察で捕まえられないような凶悪犯の欲望を転化することで、理想の世界を目指そうとする猛。力の強いものを集め、5人のメンバーがそろつ。

しかし凶悪犯との戦闘中、仲間たちがやられ、猛の恋人となったあゆみも何者かにさらわれてしまう。欲望のなすがままに世界を創り変えようという犯人の前に悩む。自分たちのやってきた力による世界が本当に正しいことなのかと。戦いの中で誰か大切な人のために願いを込めることが生きることだと気付かされるのだ。

人は何のために生きるのか。夢は簡単に手に届かないからいつまでも輝き続ける。人々に伝えたい心の叫びが今ここに生まれる。人間の醜さと欲望の源泉。無気力な少年少女たちにこの声が届くことを願っている。

第一章

第一章 手にせし力

空は青く、風は穏やか。こんな日は決まって何かが起こる。そんな気がした。

何気ない情景、高校の屋上に2人の男女が立っていた。斉藤猛は必死な思いをこらえて何もできずにいた。呼び出された高崎あゆみも何だか困った顔をしている。

「あ、あのさ・・・、えっと・・・」

「何、私に言いたいことって?」

「俺、ずっと前から君の事・・・、す・・・」

「す?」

「好きでしたあゝ。付き合ってください、お願いします」

倒れそうなくらいだった。猛はその一言を言い切ると頭の中が真っ白になっていた。あゆみの顔さえぼやけて見えた。あゆみはしばらく呆然としていた。猛の視線にまるでメデューサにでも見つめられたかのように固まっていた。猛も動くこともできない。

十分ほど経っただろうか。彼女から重い口が開いた。

「あ、あの・・・、ごめんなさい」

そう言くとあゆみは振り返って屋上のドアに向かって走り去っていった。

「ガハハハハハ、やっぱりな」

「な、言ったとおりだろ?あんな清纯派で美人の高崎さんがこんな奴と付き合っわけないって。住む世界が違っんだよ、住む世界が」

「ほんとだよね。猛がモテるわけないって言うかさ」

「てめえら、人が振られたってのに言いたい放題言いやがってえ」

「しょうがないよ。高崎さんはこの間4組の菊池も振ってたし」

「え、菊池君ってあのモデルにスカウトされたって言う？」

「ああ」

「とにかく高崎のことは諦めるんだな。勝ち目ねえって。何のとりえもなく無気力なお前なんか」

猛たちは一緒に語り合った仲間だった。ほかに仲間はいない。すっかり今では無気力になっている。学校に面白さなど求めてはいない。

前川吹雪は猛の幼馴染。ロングで金髪の美少女にはヤンキーというレッテルを貼られている。口は悪いが優しい性格の持ち主だ。猛とは幼稚園の頃からの親友で、ともに笑いともに泣いて今日まで生きてきた。

葉山洋平は背が高く痩せ型で、猛たちのリーダー的存在。お調子者だが責任感は一。父親は弁護士で、いわば家族の落ちこぼれ。そんな父に反抗するかのように猛たちとつるんでいる。

太田衛は背が高くメガネがトレードマークの情報屋。人の噂好きでコンピュータにも詳しい。中学のときに学校のホームページに不正侵入したのがばれて停学になって以来、ぐれ始めた。そんなときに出会ったのが猛だった。

上村翔太は無口でクールな奴で、背が高く体もでかい。ぼそぼそ話すことからいじめに遭っていたところ、切れて相手を病院送りにしたことからぐれて猛と組むことになった。

猛たち5人は今があれば幸せだった。どんなに夢がなくてもどんなにつまらなくても5人であることが全てと思っていた。欲望なんてこれっぽっちもなかった。信じられるものは自分たちだけ。いつもそう言い聞かせていた。そういつもはこんなに必死になることはなかったのだ。

しかし、この日は何だか違っていった。突然悲しみにくれた猛は教室に猛ダッシュで突っ込んでいった。そこで急に暴れだし、次々とク

ラスメイトを殴り倒したのである。

「おい、あれやばくないか？いつもの猛と違うぜ」

「先生呼んでくる」

「ああ、頼むぜ翔太。吹雪、衛、止めよう」

「そうだね」

吹雪と衛と洋平は猛を止めに入った。喧嘩っ早い猛の力は半端じゃない。一端は押さえ込むのに成功したものの、その怪力に振りほどかれてしまった。

そのとき翔太が呼んできた担任の岡山真先生が教室に入ってきた。「何してるんだ、斉藤。いい加減にしろ」

そのときだった。猛は近くにあった椅子を持ち上げ、そのまま先生に向かって投げつけた。その場で先生は血を流して倒れ、猛も気を失った。

「一体お前は何を考えてるんだ。岡山先生は全治1ヶ月の怪我、生徒も3人も怪我したそうじゃないか」

「すみません。俺、自分がわからなくなって・・・」

「もういい。お前はほとぼりが冷めるまで停学とする。期限は今後話し合つて決めるから覚悟しておくように」

翌日、何もやる気が起きなかった。停学処分。散々悪さしてきた猛だったが、人に危害を加えたのは初めてだった。喧嘩っ早いといつてもいじられている人を見つけては助けることが主で、今までこんなことはなかった。何に対しても無気力で、世の中つまらなさに暇をもてあましていたのだ。それがたった1回の失恋であそこまで理性を失うなんて考えようもなかった。しかもこれが失恋3回目なのだ。落ち込まないはずがなかった。

「元気出せよ。こういうこともあるって。こんなになつたのは高崎のこと本気だったってことだろ？」

「そうだよ、元気だしなよ。なんなら私が彼女になつてあげてもい

いよ。・・・って冗談だけどさ。アハハハハ・・・、って笑えないよね。ごめん」

「でもそんなに被害でなくてよかったじゃん。先生は1ヶ月の怪我だけど、浪岡は2日、大塚は1週間、佐々木なんて1日で治っちゃうんだぜ」

「そうですね。たった1回じゃないですか」

その言葉を聞いても黙ったままの猛を見かねて吹雪が名案を思いついた。

「ねえ、これから渋谷にでも出かけようよ。どうせ私も学校行っても暇だしさ、いやなこと忘れてパーと、ね」

「そ、そうだな。いつまでもくよくよしててもしょうがねえよな。行こう、渋谷へ」

渋谷の街は賑やかだった。何もかも忘れて楽しんだ。シヨッピング、ゲームセンター・・・。109の街頭テレビに釘付けにもなった。無気力の猛たちが唯一温かさを感じるのが渋谷という街だったのだ。

「ねえ、今度はあそこ行こうよ」

「はいはい・・・、ったく人使い荒いよな。一体誰のために来てると思ってるんだよ。ごめんな猛、こんなのにつき合わせてしまって吹雪、シヨッピングになると人が変わるんだよ」

「気にすんな洋平、あんなのは幼稚園の頃からだし」

「そっか、お前ら幼稚園の頃からだったよな？」

「ああ」

話をしていると、目の前を走る吹雪が誰かにぶつかって倒れていた。もうすぐ夏だというのにロングコートを着たなにやら怪しげな女性。「すみません、大丈夫ですか？」

「ええ、こちらこそごめんなさい。・・・あ、あれ、そのあなた」
そう言っって怪しげな女性は猛を指差した。

「え、俺？」

「そう。ちよつと手相見せてもらえるかしら？」

「あ、はい」

女性が猛の掌に手を触れた。すると、猛の掌が光に包まれた。

「う、うわぁ・・・」

「やっぱり、あなただったのね」

「へ？」

「ありがとう。これから何か起きたら願うといいわ
そう言つと、女性は背を向けて立ち去ろうとする。

「ちよつと待つて、あなたは一体？」

「ふふ、またそのうちお会いすると思つわ。続きはそのときにも
それじゃあね」

女性はそれ以上振り向きもせず、夜の街の雑踏の中消えていった。

「なんだつたんだよ、新手の占い師か？」

「でも結構いい女だったんじゃないか？あんな美人に手を握られて
幸せ者だな、おい」

「・・・・・・」

猛は何も言えずその場で呆然としていた。何が何だかわからない。
そんな気持ちだった。

「おいどうしたんだよ、あの美人に何言われたんだ？」

「・・・何か起きたら願えつて」

「は、何だそれ？」

「インチキ占い師みたいですわ」

「また会うだろうとも言つてた」

「は、もしかしてそれつてストーリーカーつてやつじゃ？」

「それはないよ。ストーリーカーは恋愛感情が成立してないとならない
からね」

「ま、そんなことほつといて次行くよ」

「えー、まだ何か買うつもりかよ」

「当たり前でしょ。ほらぐずぐずしてないで立つ」
「はいはい」

時刻は午後十一時を回っていた。あたりはすっかり真っ暗。そんな頃猛たちは青山通りの裏道をひた歩く。

「はあく、もうこんな時間になっちまった。本当はもっと行きたかったところであつたんだけどな」

「何よ洋平、それじゃ私がみんな悪いみたいじゃない」

「実際のところその通りだね。買い物だけで6時間。俺らだけなら半分、いや3分の1で済んでいたはずだから」

「・・・もうやめといたほうがいいですよ。吹雪さん、怒ると怖いんで」

「いや、もう遅いみたい・・・」

「おらおらおら、だつたらさっさと帰るぞ。それに私に荷物持たせんじゃねえ。お前ら男だろ？レディーに何重いもん持たせてんだ。ざけんじゃねえ」

「ひいいい・・・。わかりました、吹雪お嬢様」

「お、おい猛、お前何とかしろよ。こついつときの吹雪のゴキゲン直すのはお前の役目だろ？」

「・・・ああ。で？」

「だめだこりゃ・・・。どうやらさっきの女性に完全に惚れちまったみてえだな」

そのときだった。ドンッ。また吹雪だ。吹雪が人にぶつかって倒れた。

「ご、ごめんなさ・・・」

「てめえ、どこみて歩いてんだ、あ？」

猛たちは重い荷物を持っており、吹雪が怖くて遠く離れた場所にいる。吹雪にはこれはやばい状態だとすぐにわかった。

「本当にごめんなさい。あのこれ・・・」

「あ、・・・なんだ5万しか入ってねえじゃねえか。お嬢ちゃん、なめてんのか？」

「ひいひいひい・・・、ごめんなさい。ごめんなさい」

吹雪の目に涙が浮かんでいた。やくざらしき男は吹雪の頭を掴んで顔を覗き込んだ。

「お、よく見るとかわいいじゃねえか。わかつたよ、許してやるよ」

「あ、ありがとうございます」

「その代わりたっぷりお礼してもらわなきゃな」

「え？」

「おい、こいつ押さえとけ」

そう男が言うと、一緒にいた仲間2人が吹雪の手足を押さえた。そのまま男は吹雪の服をナイフで引き裂いた。そこからはピンクのブラジャーが顔を覗かせていた。

「いや、や、やめてー」

そのときだった。どこからともなくやくざに向かって石ころが飛んできた。洋平だった。洋平の投げた小石に続き、翔太と衛の投げた小石もほかの2人に命中した。猛は吹雪の腕を握り引っ張った。

「さあ、今のうちに逃げよう」

「猛・・・怖かったよ」

「うん。わかつたから早く」

「うん」

猛と吹雪は全力で走った。やくざから逃れるために。数十メートル進んだ先に一件のコンビニが見えた。助かったと思った。あの店員に助けを呼べばと思った。そのときだった。後ろから肩を叩かれた。やくざだ。

「俺らから因縁つけられてただで逃げられると思ったら大間違いだ」
後ろにはうずくまる翔太と洋平と衛の姿があった。どうやらやられてしまったらしい。やくざは吹雪の髪の毛をわしづかみして持ち上げた。

「さて、楽しいショータイムの始まりだ」

やくざは吹雪のブラジャーをちぎり捨てた。そのとき猛の中で何かが切れた。いつもは無気力な性格。しかし、このときは違っていた。「ちよつと待て」

「何だ、まだやる気が。俺たちに敵うとでも思っているのか？」
「うっ」

このとき勝ち目なんてないと思った。しかし、ここで引き下がったら吹雪が大変なことになってしまう。このとき猛は目を瞑ったまま祈った。やくざを追い払ってくれますようにと。

猛の身体はまぶゆい光に包まれた。まるで時間が止まっているようだった。猛がそつと目を開けると、やくざたちはその場で倒れ伸びていた。その光景に不思議がりながらも猛は吹雪の肩に触れた。

「大丈夫か？怪我はない？」

「た、猛」

その場で吹雪は猛に抱きついた。猛の顔は見る見ると真っ赤になった。

「あ、あのさ・・・服」

「あ、あー。もう猛のエッチ」

バシッ。なぜだか猛はビンタをもらう羽目になった。そのときのピンタは強烈で抱きしめられた感触とともに鼻血を出してそのままぶっ倒れてしまったのだ。

第二章

第二章 肥大する欲望

「ごつめーん。本当にごめんね」

「おー痛っ。相変わらずお前は馬鹿力だよな」

「でもさ、あれはなんだったんだ？」

「掌から光が出てましたよね」

「そう言えばあの変な女に手相見られたときも光ってたよな？」

「ああ。何か助けってくれって祈ったらやくざがぶっ飛んで・・・」

「ま、いいじゃねえか。こうして助かったんだし」

「・・・ねえ、この際停学も終わりにしてっってお祈りしてみれば？」

「おもしろそうだな、やってみるよ。別に減るもんじゃねえし」

猛は目を瞑り、掌に力を込めながら祈った。停学が解けますようにと。すると、掌が再び光を放ち、その光は部屋中一面に飛び散っていった。

その後、沈黙の中十分経っても何の変化も起きない。

「・・・あれ、何にも起こらないね」

「やっぱりたまたまだったんじゃねえか？」

「だよな。何で掌が光るのはわからねえけど、何も変化ないしな」

「それじゃ俺たち返るわ。明日学校あるしな」

「ああ、サンキュ」

その晩は何の疑いもなかった。これから起こる不思議な力と出来事の数々を。

それは翌朝のことだった。

「こら猛、早く起きなさい」

「何だよ母さん、まだ八時じゃねえか。停学中なんだし、もう少し

寝かせてくれよ」

「何言ってるの。さっき学校から電話があつて今から学校に来てく
ださいって言われたの」

「へ？」

「停学の件で校長から話があるから来てくださいって。わかつたら
とつとと支度する」

何か妙だった。もしかして昨日の願いが実現した？一瞬はそういう
考えも浮かんだが、このときはまだ信じられなかった。自分の思い
通りにできる力なんて。

学校の校長室。ここに今猛は立っている。もうかれこれ二十分ほど
経つただろうか。ガミガミとうるさい教頭の説教が続く。

そこにガシヤツとドアの開く音がした。校長が入ってきたのだ。

「もうそのへんにしておきなさい、西村教頭」

「はい、ですが教頭・・・」

「いいかい、斉藤君」

「は、はい」

「君のしでかしたことは大変なことだ。それはわかつてるね？」

「はい、反省しています」

「それでだ、君の処分なんだが・・・」

「ちよつと待つてください。俺、やめたくないです。そりゃ悪さも
したけど、こんなことは初めてで。自分でもなんでやったかわから
なくて」

「何を言ってる。お前は退学になっておかしくないことをしでかし
たんだぞ」

教頭が罵倒していると、校長は教頭の肩を叩き口を開いた。

「まあ待ちたまえ、西村君。誰も退学にするなんて言っていないよ」

「それじゃ・・・」

「今回だけは免除してあげましょう」

「ちよつと校長、それじゃ甘いんじゃない・・・」

「あ、ありがとうございます」

「ただし、ただしだ。君は授業をサボってばかりだそうじゃないか」
「・・・はい、すみません」

「そこでだ。この1年間一度も授業を休まずに学校に来ること。それを破ったら今度こそ退学にするよ。いいね？」

「はい、がんばります。ありがとうございます」

猛は嬉しさのあまり飛び跳ねながら校長室を後にした。教室に入ると、仲間たちが迎えてくれた。

「停学明け、おめでとう」

「しっかし、毎日学校来なきゃ行けないとは不運だな」

「ま、無気力男には丁度いいんじゃない？少しは学校にやる気を出すでしょ」

「頑張ってくださいね。わかんないところあったら俺が教えますから」
「ありがとう」

駆け寄ってきたのは吹雪、洋平、衛、翔太のいつものメンバーだけ。ほかのクラスメイトは猛に興味がないようだった。いつもの光景、いつもの教室がまた始まる。その中で猛はふと自分の隣の席の高崎あゆみに目をやった。しかし、あゆみは猛と目があうと、すぐに目をそらしてしまった。

「ははは、完全に嫌われたな。もう諦めろって。お前には到底届かない思いなんだから」

「おい洋平、その辺でやめとけ。また切れられたらたまったもんじやねえぞ」

「そうだったな、悪い悪い。ま、気にすんなよ。そのうちいい娘が現れるって。ほら、たとえばこの間会った変な女とかさ」

「ああ・・・」

猛はボーっとしていた。失恋のショックから何もする気が起きずにいた。このとき猛が「あゆみが俺のこと好きになっってくれますように」と願ったとき、掌が光っていたことはそのとき誰一人気付い

ていなかったのだ。

一時間目は体育だった。猛は運動神経がいいほうだが、一番疲れる科目。何に対しても無気力状態の猛が一番嫌いな科目だった。今日の授業は跳び箱。3組と4組の合同で、しかも女子とも合同だ。いつも以上に男子たちは張り切っている。

しかし、女子の注目は当然あの菊池敏だった。

「きゃー、菊池くーん」

黄色い声援が飛ぶ。菊池は女子に向かって手を振ると、いとも簡単に8段もの跳び箱を軽々と飛び越えていった。

「たく、何だつていうんだあのキザ野郎。目立ちやがって」

「お前はいつもサボってたからわかんねえかも知れねえけど、いつもあんな感じだぜ」

「菊池敏。身長189cm、体重62kg。渋谷でスカウトされていまや売れっ子のモデル。ラブレターは一日百通ほど。ルックスだけじゃなく成績も学年1位、運動神経抜群。敵いっこないよな。そりゃ菊池を振った高崎が女子から恨まれて当然だよな」

「え、高崎さんが恨まれてるって？」

「お前知らねえのか？何でも菊池の心を傷つけたとか言われていじめに遭ってるって吹雪が言ってたぜ」

「そんな・・・」

「でもチャンスじゃないですか？ここで菊池の鼻を明かせば高崎さんが喜ぶかもしれませんよ」

この言葉に俄然やる気が出た。今までやる気を出してこなかったが、このときにやらないでいつやるんだという気持ちになった。次は跳び箱十段。もちろんこの高さに挑むものは菊池だけだった。ほかのものはせいぜい7段が限界。先生が「一緒に飛ぶ勇氣のあるものはいないのか」という問いかけにも誰もが下を向いて目をそらしている。そんな中潔く猛が手を挙げた。

「お、停学明けたばかりのお前がやるのか。でもお前跳べるのか？

無理ならやめてもいいんだぞ」

「いえ、大丈夫です。やらせてください。今までサボってた分を取り戻しますよ」

一対一の対決。猛にとってそれは高崎あゆみをかけた戦いでもあった。2人同時に走り出す。女子の菊池に対する黄色い声援が飛ぶ。気合を入れる猛。しかし、久々の授業。昨日のやくざとの喧嘩で怪我した体が痛む。気合が空回りし、6段目の表面に顔面をぶつけてひっくり返った。

「ギャハハハハハハハ」

見ている生徒たちが一斉に爆笑の渦に巻きこまれた。一瞬にして猛は顔面真っ赤になった。あゆみもみんなと一緒に大笑いしている。

菊池も着地直前に尻もちをついて失敗。2回目の対決に俄然注目が集まった。

「菊池くん、ドンマイ。惜しかったよ」

再び菊池に女子からの黄色い声援が飛ぶ。そのときだった。どこからともなく聞き覚えのある女子からの声が猛の耳に届いたのは。

「斉藤君、がんばって」

小さく恥ずかしそうな声。その声の主は高崎あゆみだった。女子はもちろん男子もそれには驚いた。学年ナンバーワンのアイドル・高崎あゆみが猛に声援を送っている。注目されないわけがなかった。

猛にももちろんその声は届いていた。猛は心の中で祈った。「今度こそ跳び箱を跳べますように」と。

掌が光り、体のなまりと痛みが消えていく。何だか跳べるような気がした。思いつき走りロイター板を踏み切る。高さは足りた。後は腕だけだ。

だが、タイミングが合わない。ダメかと思ったそのとき、腕がひとりで動き出した。ドンツという勢いととも箱の上部を突き、体は前に飛ばされる。着地こそ失敗したものの十段もの跳び箱を確実に飛び越えていた。

「ワーーーーー！」

大きな歓声が上がる。あゆみが最初に拍手をしたのに続いて一斉にクラス中、体育館中に響き渡った。完璧に跳び、着地まで成功した菊池のことはそっちのけ。菊池を応援していた女子までもが猛に釘付けだった。洋平が寄ってくる。

「すげえじゃねえか。お前もやる気になればできるんだな」

「あ、いや・・・、俺夢中で」

そのときあゆみが立ち上がり、猛に近寄った。

「あ、高崎さん・・・。その・・・」

「すごかったね、おめでとう。かつこよかったよ」

「いや・・・その・・・」

「それと、・・・この間は逃げ出しちゃってごめんなさい。急だったから・・・」

「いや、とんでもない。こっちの方こそごめん。そうだよな、俺みたいなの夢も希望も持たない男なんて好きになってもらえるわけないよな・・・」

「そんなことない。そんなことないよ」

「えっ?」

「えつと・・・、恋人じゃなくて友達でいいならこちらこそよろしくお願いします」

あゆみは照れくさそうに頭を下げた。信じられなかった。現実には好きな女の子と友達とはいえ受け入れてもらえるなんて。猛はあまりの嬉しさに何が何だかわからず呆然と沈黙を保っていた。

「ほら、よかつたじゃねえか。早く返事してやれよ」

「あ、うん。ありがとう、こちらこそよろしく」

「うん」

猛とあゆみはその場で握手をした。吹雪以外の女子と手を握るのは初めてだった。とても暖かかった。彼女の笑顔がまぶしかった。今まで何の希望も夢もわかかなかった人生とは今日でおさらばだ。そう心に決めた猛であった。

このときようやく力の存在に気付き始めていた。明らかに自分の

身の回りに不思議なことが起こりすぎる。それも決まって心の中で思ったことばかりなのだ。たまたまなのか。それともあの女性が掌に触れたことよって何か不思議な力を手にしたのか。猛はそのことを試してみたくなくなっていった。

翌日、5時間目は美術だ。昼食はいつものメンバーたちと一緒にあゆみの姿もそこにはあった。いじめはまだなくならないが、猛は自分が守ると心に決めていた。精一杯生きる目標ができた。あゆみの笑顔を見るだけで幸せだった。

今日の授業は男女ペアになり、似顔絵を描くこと。猛は迷わずあゆみを選んだ。

「それにしても猛と高崎があんなにうまくいくとは思わなかったな。これであいつも丸くなるんじゃないかねえのか？」

「でもおかげで私は洋平とペア。あゝあ、私ももっと積極的に行くんだったな」

「何だよ吹雪、お前猛のこと好きだったのか？」

「何よ、悪い？似顔絵、ヘタクソだったら承知しないからね」

「はいはい」

猛は焦っていた。実は絵を描くことがこの上なく苦手なのである。ここで下手な絵を描いたらあゆみに嫌われる。そう思うと額から掌から汗でびっしょりになっていった。もうすぐ夏休みだというのもあるのかもしれない。それにあゆみの顔を見るたびに照れてしまい、顔が赤くなっていた。おかげで手が震える。

「どうしたの？汗びっしょりじゃない」

「いや、何でも。。。俺、絵がヘタクソでさ」

「え、そんなこと気にしてないよ？私だってほら、こんなに下手っぴで。。。」

あゆみは猛の似顔絵を猛に見せた。それはとても下手と言えるものではなかった。いや、むしろうまい部類だろう。確かに少し雑には見えたものの、それは一目で猛を描いたとわかる代物だった。

「すごい、それあゆみが描いたの？」

「ええ、まあ・・・」

「これ見てよ、洋平の描いた私の似顔絵」

そこにはおぞましい光景が描かれていた。洋平は机の下で丸くなり、うずくまっている。だが、確かに似ている。悪魔のような形相がそっくりで猛は思わず笑ってしまった。

「ちよつと何笑ってんのよ。そんなに笑うんならあんたのも見せてみなさいよ」

そう言つて吹雪は猛の持つているスケッチブックを奪おうとする。猛は必死に抵抗した。こんなひどいを見せるわけにはいかない。おそらく吹雪のことだ。猛の絵がヘタクソなのを知っているの行動だろう。そのとき思い出した。「そうだ、願えばいいんだ」ということを。

猛が「うまい絵が描けてますように」と願った瞬間、吹雪にスケッチブックは奪われた。吹雪とあゆみは裏返しになっているスケッチブックをひっくり返し、覗き込んだ。

「何これ？」

吹雪のその一言が聞こえた瞬間ダメだったかと思つた。やっぱり今までののは偶然だったのかと思つていた。次の一声を聞くまでは。

「これすごいよ。どうしたの猛？いつからこんなに絵が上手になったのよ？」

猛も自分の絵を見る。そこには自分の描いたものとは全く別物のリアリテイあるあゆみの姿が映し出されていた。いや、もしかしたら本物以上かもしれない。あゆみの魅力の全てがそこに凝縮されていたのである。

「こんなにキレイに描いてくれてありがとう」

その一言によつて、心に突き刺さるようなドキドキが収まらなかった。

間違いない。「願いは必ず叶うんだ」という考えは否定しようがなかった。当然この力を利用しない手はないと猛は思った。誰にも

言わずにこの力を使うことを決めたのがこのときだった。

翌日、七月十四日は午後には水泳の授業がある。だが午前中には嫌いな数学と物理の授業があった。ここで猛は試してみたくなった。この力がある限り、自分の存在は絶対だ。思い通りになる現実がある。そう思うと猛は「今日一日中男女混合の水泳の授業になりますように」と願っていた。

朝のホームルーム。猛はこの力が本物だと信じながらも、なかなか実現しないことにいらだち、焦っていた。そのとき、どたばたと副担任の羽田涼子先生が走って教室に入り込んだ。息を切らしながら一端自分を落ち着かせて言った。

「えー、今日は男女混同の水泳大会とします」

その言葉に男子は歓喜の声を上げ、女子は大ブーイング。学級委員の真鍋由佳が先生に文句を言った。

「先生、何で急に変更何ですか？それに男女混同って……。ありえないんだけど」

「何言ってるんだよ、授業が潰れんだからラッキーじゃん」

「それは男子の言い分でしょ。どうせ私たちの水着姿見たいだけじゃない。このエロ男」

「何だとー。もう一偏言ってみるよ、このブス」

「ちよつと、そのくらいにしなさい。先生たちがみんな食中毒で今日はお休みだから仕方なくなのよ。ほら、わかつたらさっさと更衣室に行きなさい。女子は更衣室、男子はここでね。三十分後にプールサイドに集合よ」

「はい」

願いは叶った。プールサイドには男女問わずスクール水着の3年生がギョウギョウ詰めと並んでいる。3年生全員でのプール大会のようだ。1組から5組まで総勢150人がプールサイドに集まっているのだ。狭くないはずがない。準備体操が苦痛だった。男の見せ所。当然猛にも気合が入った。

しかし、ここで再び苦悩が襲った。実は猛はカナヅチなのである。小学校の頃から水泳はだるいといってサボっていたためにまともなプールに入ったことがない。それだけに泳げと言う方が無理な話だった。あゆみの水着姿見たさにこんな願いをするべきではなかったと後悔していた。

そんなとき洋平が猛の耳元でささやいた。

「猛、泳いだことなかったよな？泳げねえんじゃねえのか？」

「そ、そんなことねえよ。大丈夫だから心配すんなって」

「そっか。それならいいんだけどな。とにかく自分の番になる前に人が泳ぐとこ見といたほうがいいぜ。参考になるかも知れねえしな」
「ああ」

もはや力に頼るしかなかった。ここでトップを取ってあゆみにいところを見せる。願いをこめたまま自分の番がやってきた。

「おい猛、腰が引いてるぞ。もつとまっすぐ伸ばせ」

洋平からのアドバイスにも聞く耳は持たなかった。普通に泳ぐだけならともかく飛び込みスタートなのだ。飛び込み方はテレビで観たことがある。だが失敗したら相当痛いということもよく聞く。その衝撃で失神した人もいたらしい。ましてや猛はカナヅチ。怖がらないはずがなかった。

「斉藤君、がんばって」

あゆみの声援が飛ぶ。その笑顔と水着姿がまぶしい。猛は彼女を直視出来ずにいた。そのときの猛には力に頼って祈ることしか出来なかったのだ。

掌が光る。それと同時に先生のスタートの合図、ピストル音がドーンと一発鳴り響いた。いくら力によって大丈夫だとわかっているも怖かった。ピストルの合図に反応できず、猛は出遅れた。飛び込む勇気がなかったのだ。そおつとプールの壁を掴みながら着水する。漸く二十秒遅れのスタート。隣のコースに行く相手はもう二十五メートル付近。

しかしそこから違った。これが力の効果なのか。泳ぎ方すら知

らない猛の身体が意思にそむいてすごい勢いで加速する。息つきもしていないのに全く息苦しくない。水中の中で目を開けても水が当たらないようだった。

「これならいける」

あつという間にその差は見る見る縮まっていった。十メートル、五メートル、二メートル、一メートル……。およそ二十五メートルもの差があつた距離はわずか十秒後には逆転。最後には五メートルもの差をつけてのフィニッシュだった。

「あああああ……！」

生徒、先生のみんなが口をあんぐり開けて呆然としている。無理もない。そのタイムは計測不能といつてもいいくらいとんでもないものだったのだから。五十メートル三二秒一。先生の押したストップウォッチにはそう照らし出されていた。

「す、すごいよ。斉藤君って水泳得意だったんだね」

「あ、ああ。まあ……」

自分でも信じられない。いくらなんでもやりすぎたと反省した。あゆみの言葉でみんなの緊張が解けたのか、漸く猛に向かって拍手喝采が送られた。猛は何だかいい気分になっていた。

その日の夜、猛はこの力はもつといるんなことに応用できるのではないかと考えた。白紙のノートに出来る限りのことを書いてみることにしたのだ。

『七月十五日、学校から帰ってみるとポストに百万円が入っていますように』

『七月十六日、学校のテストで全教科満点取れますように』

『七月十七日、突然の台風で学校が休みになりますように』

『七月十八日、パチンコで大当たりしますように』

『七月十九日、終業式が一発芸大会に変わりますように』

『七月二十日、夏休みの宿題が知らないうちに全部終わっています』

ように』

猛は思いつくまま一日ひとつずつ、願いをノートに書き溜めていった。出来るだけ詳しく実現可能なものを。掌が光ることが願いが叶う証だと気付き、自分が神になった気分だった。何でも自分の思い通りになる力。こんな素晴らしい力を利用しない手はない。ノートは八月三十一日、夏休みの終わりまで埋まっていった。

翌日からことごとく願いは叶った。百万円、テスト満点、休校、パチンコ、終業式、宿題、あゆみとの進展、タダ飯……。自分の手にしたこの力が怖いくらいだった。もうそこにはあの無気力で何のとりえもない斉藤猛の姿はなかった。そこにいたのは王様なのか神なのか、傍若無人に振舞う欲望の塊と化したひとりの男子高校生しかいなかったのだ。

第三章

第三章 神田 真由子

八月の半ばだった。猛の思い通りにいかない出来事が起きたのは。八月十七日、この日あゆみを含めた猛たち6人は沖繩に旅行に来ていた。洋平のおじさんが沖繩に住んでおり、「友達も一緒に」と誘われたのだ。天気は快晴。絶好の海水浴日和だがもちろんカナヅチの猛は水の中に入ろうとはせず、一人浜の周辺を散歩していた。一時間ほど歩いただろうか。周囲を一周グルツと回ってみんなのいたビーチに戻ると誰もいない。もうおじさんの家に戻ったのだろうか。そう思つて後ろを振り向くと、あゆみの姿があった。

「うわぁ・・・！」

純白のワンピースに夕暮れ間近の日光に照らされた肌。こんがり焼けた小麦色の顔。突然真後ろに彼女が立っていたことにも気付かず、猛はびつくりして後ろに倒れ、尻もちをついてしまった。

「ふふ、驚いた？」

「あ、うん。ちよつと・・・」

「・・・ねえ、今度は私と行かない？」

「あ、うん。いいけど・・・」

このとき猛は思い出していた。今日、八月十七日にあゆみとデートできますようにと願っていたことを。今までデートらしいデートはしたことがなかっただけに嬉しかった。もちろん友達という立場ではあったが。自然と猛は彼女の手をしっかりと離さないように握っていた。

「わぁ、キレイ」

「本当だ・・・」

あゆみの夕日を眺める瞳はとても輝いて見えた。猛はそんなあゆみの顔をずっと眺めていた。何か忘れていたものを取り戻した感じだ。猛にとつてあゆみは宝物であると同時に、本当に好きなんだなと改めて実感していた。

「ねえ斉藤君、もっとあつちの方まで行ってみようか？」

「え、でもこんな時間だけ。みんな心配するんじゃないかな？」

「あれねえ・・・、いつからそんな真面目君になっちゃったのかな？あゆみが大きな目をくりくりさせながら顔を近づける。学校で見たいじめられっ子の彼女とはまるで別人のようだ。真面目で清楚でといったようなイメージは全く感じさせない。好奇心旺盛で明るい少女が猛の眼には映っていた。

猛は恥ずかしさのあまり後ろに一步引いた。今まで吹雪以外の女性とは全く面識がなかったのだ。女性に対して免疫がついていないのも当然だった。

「わ、わかったよ。行ってみよ」

「ありがと。それでこそ斉藤君ね」

この言葉に弱い。「もしあゆみと結婚したら絶対尻に敷かれるんだろうなあ」と思いながらもそれは心に留めておいた。

木の幹を掻き分けてまっすぐ進んでいくと、そこには小さな湖があった。海とはまた違つどこから水が入ったのだらうと思わせるような湖だ。水溜りが溜まりに溜まって出来上がったのかもしれない。それはまるで砂漠の中のオアシスのようだった。

「見て見て。この水、おいしいよ」

あゆみは猛がオアシスを見て呆然としている間にも湖の中に身体を預け、水を口に含ませていた。服が濡れることも来る途中に擦り傷が出来たこともお構いなしだ。

猛は彼女の笑顔に応えるように手を振った。猛も湖に足を踏み入れようとしたり。がその瞬間、あゆみの身体がぐんと沈むのがわかった。

「た、助けてー、斉藤君！」

彼女の悲鳴が猛に投げかけられた。底なし沼だ。彼女の身体は見る見るうちに沈んでいく。猛は彼女の側の陸地に回りこむ。「手を伸ばしていて」と彼女に指示し、走った。一刻も早くあゆみを助けなければ。

しかし、ここで誤算が生じた。何度祈っても掌は光らない。いつもなら掌が光り身体が自動的に動いてあゆみは助かるはずだ。なのに肝心なところで力が発動しない。今までくだらないことに使いすぎたバチが当たったのだろうか。反省する暇など猛には残されていなかった。

何とかあゆみの腕を掴んだ。安心してばかりはいられない。救出した方がいいが彼女の身体は頭のとっぺんまで埋まっていたのだ。それにその前に沼の水まで飲んでいた。救出した頃にはすでに息が出来なくなっており意識がなかったのだ。

「くそ、何でこんなことに・・・」

もちろん諦めるわけにはいかない。彼女のおなかを押し水を出す。頬を叩いて意識を確認する。胸に耳を当て心臓の音を確認する。幸い脈はドクンドクンと息づいている。大丈夫、まだ助かる。

猛はテレビでやっていたことの見よう見真似で人工呼吸を始めた。スウー、スウー、フウー。鼻をつまみ、頭を起こし、身体の向きを向け、大きく息を吸って彼女の唇に自分の唇を重ねる。このときフーストキスだとか恋人だとか余計なことを考える余裕はなかった。ただひたすら彼女が助かってくれることを願っていた。

その願いが通じたのか、五分後にあゆみは水を吐き出すようにして蒸せ返り、息を吹き返した。

「・・・斉藤君・・・。どうしたの、そんな泣きそうな顔して・・・」

「高崎さん・・・。よかった、よかった！」

猛はその場で彼女の上半身を持ち上げ、抱きしめた。何もかも忘れてただただ彼女が無事だったことを喜んで。

暗くなつた夜道を2人は歩いていく。猛はまだ万全ではない彼女を気遣つておんぶして森の中を逆戻りしていった。泥だらけの服。ぐちゃぐちゃの頭。ところどころに出来た擦り傷。当然帰つてから散々洋平たちやおじさんに説教させられた。ただあゆみと二人一緒なのが猛にはたまらなく嬉しかった。2人顔を見合わせて笑つていると、説教の声はさらに激しくなる。それでも2人は笑つていた。2人にとつて一生忘れないだろう思い出となつた一日だった。

あつという間の夏休みだった。嵐のようなめまぐるしさ。あの日以来猛は力に頼ることをやめた。あんな力に頼らなくてもおもしろいことはたくさんある。現に自分の力であゆみを救うことが出来たのだ。もう無気力な自分には戻らないし、自分の力で道を切り開く。そう心に誓っていた。

九月一日。今日は始業式と同時に防災訓練が行われる日だ。あつてもなくても対策なんて変わらない。そう思つていた猛にとつて、これほどかつたるい行事はない。いつもならみんなが逃げている間にサボつてパチンコにでも行くときだ。しかし、今年は校長との約束があつた。それを破るわけにはいかない。力を使えば取り消すことも出来るのだから、この間みたくに使えないかもしれない。何よりも力を使わないと心に決めたのだ。嫌でも参加しないわけにはいかなかった。

始業式が始まつた。校長の話は相変わらず長い。もうかれこれ三十分以上も話していた。バタバタと貧血で倒れる人も続出。九月とはいえ今日の気温は三十二度。今年は残暑が厳しいらしい。セミの声がいまだに響き渡っている。

「全く、生徒が熱中症になつたらどうするんだ」と意気込んでいると、何やらまぶゆい光が猛の目の前を通り過ぎた。どこかで見たようなその光は校長を中心に当たり一面に飛び散つて一瞬にして消えた。

その瞬間、校長の顔つきが一変した。そして次の言葉には耳を疑った。

「えー、では今日からですね、暑いので夏服を変えようと思います」校長がそう告げると担任の先生からひとりひとりに新しい制服が手渡された。男子は半そでに半ズボン。ネクタイも上着もなく、まるで体操服だ。「これならいつそのことジャージを制服代わりにすればいいのに」とぼやきもした。

それ以上に驚いたのが女子の制服だった。

「先生、本当にこれを私たちが着るんですか？」

「ああそうだ。これは校長先生自らがデザインしたものだ。まだ試作品で1着ずつしかないから大事に着るように」

女子からはブーイングの嵐。「こんなの着れない」と泣き出す子までいた。

猛たちもあゆみと吹雪に制服を見せてもらった。そのデザインは一見普通の制服のようだが、とにかく露出度が高い。胸の真ん中には大きな穴が開いており、谷間が見える。おへその周りにも穴があり、スカートの丈はあってないようなもの。背中の一部にも切込みがあった。

校舎中には制服の下にTシャツとジャージを履いた女子が目立つようになつた。何だか前より露出が少なくなつたような気がする。女子の態度もかなり不機嫌だ。話しかけようとすればギロつと睨まれる。いつの間にか男子は縮こまり、女子との間に壁を作るようになっていた。

昼休み。珍しく猛たち6人は学食にありついていた。普段は学食など食わずにコンビニ弁当ばかりなのだが、前に猛が力によって手に入れた百万円のおかげでみんなにおごっているのだ。

「おいしいね」

「ああ、うん」

「それにしてもどういう風の吹き回しだよ。俺たちに飯おごるなんてさ」

「そうだけ。ケチで有名、学年でも1、2位を争うほどのドケチ王のお前が」

「もしかして盗んだんじゃないよね？何か変だと思ってたんだよね。最近猛にばかりいいことがあるからさ」

「う、そんなことねえよ。ほらほらいっぱい食え」

猛はちよつと後ろめたかった。確かにこのお金は力によって手に入れたものだ。自分の努力で手に入れたものじゃない。もうこれに力にあやかるともやめようと心に命じた。

そのときだった。また一瞬あの光が見えた気がした。

「何だ？」

どうやらみんなには見えていないらしい。あの力を使ったときに出る光が。猛が掌に光を放ったときはみんなにも見えていた。

「気のせいなんじゃ・・・」と思った瞬間、カウンター越しに座っていた男子が突然倒れた。

「きゃああああー！」

叫びだした女子もその場に倒れる。

猛が立ち上がり倒れた生徒に近づこうとした瞬間、すぐ近くでガラスコップがバリントと割れる音がした。

「おい、しつかりしろ」

テーブルに身を預けて倒れたのはあゆみと吹雪の2人だったのだ。

猛と洋平は2人を担いで保健室まで運んだ。どうやら急性の食中毒らしい。先に倒れた2人も同じ症状だった。2時間も休めば症状は治まるという。どうしてあゆみたちがなって猛たちがならなかったかの原因は不明である。

しかし、猛は見た。一筋の青白い光を。猛は決心をし、洋平にだけは真実を話すことにした。

「そうか。そんな力があつたのか・・・」

「俺も最初は信じられなかった。でも見ただろ？前に俺たちがやぐざに絡まれたとき、俺の掌から光が出ていたのを」

「ああ、確かに光ってた」

「でも俺はもう力は使わないと決めただ。大体今日の出来事で俺が得することは何も無い」

「もちろんだ。俺は猛を信じる」

「ありがとう。それで俺は思ったんだけど、もしかしてほかにこの力を使える奴がいるんじゃないかな？」

「俺も今の話を聞いてて薄々感づいてた。それならやっぱり奴が怪しいぜ」

「奴？洋平、何か心当たりあるのか？」

「あるも何も俺たちがすでにあってる奴だよ。もう忘れちゃったのか？あんときの女だよ。ほら、ロングコート着たインチキ占い師」

この言葉を聞いて思い出した。そうだ、あのときの女性だ。思えばあの女性に手相を見られてからこの力が使えるようになったのだ。彼女なら何か知っているに違いない。猛と洋平は放課後、渋谷に行き占い師を探し出すことを約束した。

放課後。下校の時刻になった。食中毒が治ったあゆみと吹雪はそのまま早退し、衛は部活、翔太は塾。その日は運良く猛と洋平の2人きりになっていた。

「おし、それじゃ行くとしますか」

「ああ」

階段を駆け下り、靴を履く。そのままダッシュで校門をくぐろうとすると、先に行く洋平が誰かとぶつかった。

「あ、その、すみません。それじゃ急いでるんで・・・」

そう言っただけ振り切ろうとすると、あたりにはまたあの青白い光が降ってきた。洋平の身体は宙を舞い、そのまま停止して動かなくなってしまった。

一見普通の女性に見えて気付かなかったが、洋平がぶつかった誰

かとはあのときのインチキ占い師だったのだ。

ロングコートではないが、この暑いのに数枚にも重ねた長袖の服とマフラー、Gパンを着た女性がそこに立っていた。あのときはコートでわからなかったが、意外とスリムな体型をしている。目がパツチリしていて黒の「エクステ」と世間で呼ばれている髪形。あのときは直視できなかったが、なるほど洋平たちが言うように美人だった。

「なぜあんたがこんなところに」

猛の第一声。何を言っているのかわからなかった。とにかく正体と力のことを知りたい。それだけを思ったら口をついて出ていた。

「言ったでしょう？いずれまた会うことになるって」

彼女は眉ひとつ動かさず言う。洋平は宙に浮きながら話に割り込んだ。

「あんた一体何者なんだ？どうせ学校で今日起きたことも全部あなたの仕業なんだろう？」

「・・・私の名前は神田真由子。君たちの隣の大学、万国国際大学に通ってる大学生。確かに学校で騒ぎを起こしたのは私よ。でもそれは君に気付いてもらいたかったからなの」

真由子は猛を指差して言った。

「俺に気付いてもらいたかった？どういうことだ？」

「そのまんまよ。とにかくこれから私についてきてよ。能力についても全部話したいから」

「お、俺は？」

「あなたはダメ。これは力を持っているもの同士にしか話せないことなの。いい、猛君もあなたもこのことを誰か人に言ったらそのときは命がないと思ってよ」

目が本気だった。きれいな顔立ちとは裏腹に芯の強いおっかない女性だと第一印象で感じた。猛はしぶしぶ彼女の後を追うしかなかったのだ。

学校に程近い喫茶店。並木通りに車の騒音が耳に入る。学生の笑い声、子どもが親に駄々こねて泣き喚いでる声、会社の資料に使うのかパソコンでカタカタとキーボードを叩く音、女性のアルバイト店員の声高く響き渡る「いらっしやいませ」の挨拶……。そんな雑音がわずらわしい。

猛と真由子はこの店に入ってからもう十分以上立つというのに黙ったままだ。彼女はコーヒークップ片手に少しずつすりながらこちらの顔色を窺っている。猛には目線をそらす以外なかった。威勢を張って彼女と一緒になれたはいいが、緊張のあまり汗だく。ひざに添えられた手もずつと震えつぱなしだ。蛇に睨まれた蛙とはこのことを言うのだろうか。

カチカチッ。時計の針が5時半を指した。彼女はコーヒークップをテーブルの上に置き、猛に掌を見せるように言った。猛が言われるまま手を差し出すと、意外な答えが返ってきた。

「やっぱりね。君、この力が何なのかわからずに力を使ってたんでしょ?」

「当たり前じゃないですか。使い方も教えられてないのに・・・」緊張のあまり敬語で話している自分にも気付かず、猛はテーブルを叩いて彼女に詰め寄った。

「そうよね・・・悪かったわ。それじゃあ力について一から説明するからちゃんと聞いてね」

「あ、はい」

彼女の説明によると、力の名前は『GOD OF DESIRE』というらしい。欲望の神という意味だ。願いをこめることによって掌に光のエネルギーが蓄積され、それを解き放つことで願いが叶うというものだそうだ。

人間誰でも自分の願いを形に出来る力を持っているが、そのコントロールが出来ないがために「夢は願っても叶わない」と諦めてしまいう人が多い。猛が力を使えるようになったのも彼女がその力をコン

トロールできるよう自分の力で願いをこめて掌に触れたからだったのだ。

「でもひとつわからないことがあるんです」

「何かしら？」

「俺、前に力が使えなかったことがあるんです。そんなときは自分の力で解決したんですけど、後から思えばくだらないことに使いすぎたからなのかなと思って」

「……」

何やら彼女は黙り込んだ。考え事をしているようだ。ほんの数十分空いた後、彼女は言った。

「それが力を理解してないって意味なのよ」

「え、どういことですか？」

「君、一日に大量に願い事をしたりしなかった？」

「ああ、はい。夏休みに入る前にまとめて夏休みまでの全部の願い事を一日ひとつずつノートに書いて願いました。でも使えなかったのはそれから一ヶ月後で……」

「そのノート、今持ってる？」

「あ、はい」

真由子にノートを手渡すと再び沈黙が続いた。一ページ一ページ丁寧に読んでいる。何か問題でもあるんだろうか？ 猛は不安で不安でたまらず、何度も紅茶のおかわりを店員に注文していた。

ノートの隅々まで読み終わった彼女の顔つきは神妙なおもちに変わっていた。猛はますます怖ったが、そらすわけにはいかなかった。ついていた。

「やっぱり私の思ったとおりだったわ」

「！どういことですか？」

「力を使いすぎたのよ。一日に使える願いの限度には個人差があつてね、君の場合は大体一日3つまで。もちろん願いの大きさによって変わってくるけどね。限度を超えても願いは叶うし、力は使える。」

けれどその負荷は後になって響いてくるわ。君が言ったみたいに急に使えなくなるとかね」

「そうか、だからあの時何の反応も」

「ええ、そう。君、その日以降に力を使ったことは？」

「ないです」

「やつぱり・・・」

「でも俺、もう力使う気はありませんから」

「・・・それじゃ困るのよ」

「え、どうして？」

「何で私が君の力を目覚めさせたか、わかる？」

「いえ、全く」

「そうよね、普通なら気付かないわね」

「一体どうしてなんですか？まさかその力を悪用しようとしてるとか？それとも今日みたいに学校で悪事を働くのを手伝って欲しいとか？だとしたらお断りします。すみませんけど・・・」

「違うわ、どっちも外れ。私はね、この世界をあなたの手で創り変えて欲しいの」

「創り変える？俺に神様みたいなことをやれって言ってますか？」

「簡単に言えばそういうことね。これからは私の言うとおりに力を使って欲しい。もちろん余った分の力は自由に使ってもらってかまわないわ。悪いことには使わない。これでいいでしょ？OKなら今の場で私の手を握って。ダメならそのまま帰ってもらってかまわないわ。あなたの力はコントロールを失いかけてる。私から力をもらわないと近いうちに使えなくなるわ」

猛は迷わず彼女の手を握った。ただの興味本位ではない。彼女の志に共感したのだ。こうして彼女は電話番号とメールアドレスの書いたメモを手渡すと、夕暮れの雑踏に消えていった。

第四章

第四章 俺たちの熱い青春

あれから一ヶ月が経とうとしていた。一向に向こうから連絡が来る気配がない。電話をしてもいつも留守電。メールを送っても「もうしばらく自由にして」と返事があるばかりで暇だった。もしかして作り話だったのかとも思い始めていた。結局力は使っていない。猛はとりあえず彼女から連絡があるまでは普通に過ごそうと割り切っていた。

十月三日。今日は体育祭が行われる。いつものようにかつたるいなど思いながらも、開会式の列に猛の姿はあった。猛たち3組は力をあわせて優勝を狙う。

「おーし、今年こそ4組に勝って優勝だー」
そう叫ぶのは応援団長の3年生、生島憲二。いかにも体育会系という印象で筋肉隆々。アメフト部の部長というだけあって何でも気合さえあれば乗り越えられるとも言わんばかりの性格だ。

猛たち1年は知らなかったが、昨年あと一步のところまで4組に優勝をさらわれたらしい。それだけに今年こそはの思いが強いのだろう。もしドジったら殺されるといっても不思議ではないくらい先輩たちの気迫に1年生は気圧され気味だ。

それは猛にとっても同じだった。4組にはあの菊池もいる。もうあゆみのことでどうのこうのではないものの、やっぱりライバル視してしまう。

跳び箱での勝負のときは力のおかげで勝った。しかしあれは実力ではない。猛の運動神経は中の上。力には自信があったが、速さやテクニクを競うものには不安を感じていた。

そこへその渦中の人物、菊池敏が猛の目の前にやってきた。

「やあ斉藤君、今日はよろしく」

「あ、うん。よろしく」

「今日はいい勝負をしようね。僕だってあのままでは引き下がれない。こつちも本気でいかせてもらおうよ」

「もちろん。こちらこそよろしく」

菊池は猛と握手を交わした。相変わらずのキザ野郎。猛は性格的に菊池が嫌いだった。猛の心の中では「絶対に負けねえ」という強いライバル心が生まれていたのだ。

競技は次々と進んでいく。猛の出場する最初の競技は百メートル走。菊池とは違う組のため直接は対決にならない。しかし力みすぎたのか、ピストルによるスタートの合図が鳴ると同時に足が前に進まず出遅れた。持ち前の体力で必死に猛追するが、時すでに遅し。3位を確保するのがやっとだった。

「ドンマイ。次で挽回すればいいじゃん」

「そうだよ。ただでさえ猛は走るのには苦手なんだし、ね」

洋平と吹雪の励ましにほっとしながらも、後ろの生島団長の睨むような視線が痛かった。「次は失敗できないな」というプレッシャーが重くのしかかったのだ。

次の競技は昼休み直前のクラス対抗綱引き。1年では力があるというだけで猛、吹雪、洋平、衛、翔太の5人も選手に選ばれていた。「たく、何で私まで綱引きのメンバーなわけ？女子で私一人だけじゃない」

吹雪はかなりゴキゲン斜めのような様子だ。こういうときの吹雪はうまくなだめないした後が怖い。

「ほら、ただの人数合わせだって。二十人に足りないからたまたま女子で一番運動神経がいい吹雪に任せることにしたんだよ」

洋平が恐る恐る言葉を発する。

「そうですね。じゃなきゃこんなにか弱い前川さんにこんなことや

らせるわけないじゃないですか」

翔太がさかさず洋平の話に乗っかると衛がなにやら難しそうな表情で言う。

「でも吹雪の体力は男子に負けず劣らずだという体力テストの結果も出てる。握力は俺よりすごいんだぜ。適任なんじゃないのか？」
一斉に猛たちの視線が衛に集まる。無言で「何言ってるんだ」とでも言わんばかりの表情だ。衛がその視線に耐え切れずおどおどしていると、吹雪が衛の胸倉を掴んで叫んだ。

「悪かったわね、馬鹿力女で。昼休み、覚悟しておきなさいよ」

「ひいひいひいー！」

吹雪が胸倉を離して不機嫌な態度でその場を立ち去ると、衛は尻もちをついてしばらくおびえた表情をしていた。衛は猛と洋平と翔太に肩を貸してもらい、何とか立ち上がることができたのである。

総当たり戦で上位2組が決勝を行うというちよつと変わった綱引きのルール。猛たち3組は次々に勝ちあがっていった。対1組2対0、対2組2対1、対5組2対1。ライバルの4組との対戦を待たずして決勝進出が決まった。一方の4組も対1組2対0、対2組2対0、対5組2対1と完勝。この時点で3組と4組が決勝進出を決めたことで時間短縮のため、次の3組対4組戦が決勝戦として扱われることになった。

「おーし、ここは絶対勝つぞ！」

生島団長の力強い掛け声がメンバー二十人全員に届く。これまでの試合で手が擦りむけながらも綱を手に寄せる。

スタートの合図が鳴るまでの数秒がとても長く感じた。対抗のクラス同士が睨み合う。誰もが歯を食いしばって今か今かとタイミングを計る。スタートで腰が持っていかれたら終わりだ。嫌がおうにも緊張が走る。

ドンツ。ピストル音が一発鳴った。スタートの合図だ。一斉に力が入る。どこからともなく応援する観客にも熱がこもる。大きな雄た

けびとともに両者の攻防戦が繰り広げられた。

最初に自軍に綱を寄せたのは4組。一步一步じわじわと綱を持っていかれる。必死に食らいつこうと3組も抵抗する。持ちつ持たれつの一進一退の攻防戦は長く続いた。

一分、二分、三分、五分、十分……。十五分経っても決着がつかない勝負に猛たち1年は腕がしびれていた。それでも負けられないと思つた瞬間、2年生の一人が石に躓き、一気に4組側に綱を持っていかれた。

バンツ。最初の勝負の軍配は4組に挙がった。躓いた2年生は団長にもものすごい剣幕で叱られていた。よく見ると負けた3組はもちろん、4組もかなり疲れているようだ。息を切らす選手たちは一様に辛そうな表情をしている。

「いいかお前ら。俺たちは今年こそ優勝を狙う。そのためにはこの綱引き、どうしても落とせないんだ。気合入れていけよ」

団長の熱い言葉にも耳を傾ける余裕のある奴などほとんどいない。みんな自分のことで精一杯だ。

2回目の勝負。再び手に汗握る長期戦になった。全員がおりつたけの力を振り絞り、綱を引く。弱音など吐く者はいない。泥だらけの体操服には手抜きなど微塵も感じられない勝負の世界が映し出されていた。

勝負は一瞬で決まった。2回戦が十分を過ぎようという頃、一気に両者の集中力が途切れ、その中で唯一気を抜かなかった生島団長が引き抜くことで決着した。

これで勝負は1対1。振り出しに戻った。しかしその表情に力強さはない。さすがの生島団長も今の一戦で疲れたようだった。

最終決戦の3回戦。どちらの組にも綱を引き合う気力がない。綱を手に持つのがやっとという感じだ。そこには決勝戦を開始したときのような余裕に満ちた表情はなかった。

両者に引き合う気持ちがないことから審判に一度注意を受けたが、それでも流れは変わらなかった。いや、変えられなかったのだ。あ

と5分このままなら無効試合と審判に言い渡された。
残り時間数十秒というところだった。このまま無効試合になってしまふのかと誰もが思った。そのとき猛には見覚えのある青白い光が生島団長の掌から出ているのがわかった。

あの力だ。猛は真由子に自分に直接関わりのない人には、力をコントロールできる人以外は光を見ることができないと教えられていた。間違いない、とそのとき確信した。猛は自分と真由子以外に力をコントロールできる人がいることに驚きを隠しきれなかった。

光が分散して当たり一面に飛び散ったとき、綱が急に緩くなった。その勢いに任せて団長ほか3組全員が一斉に引き上げ、長い綱引き勝負は勝利に終わった。

昼休み。綱引きに参加した3組と4組のメンバーはさっきの疲れでぐったりしていた。力を使い切り、起き上がるのもやっとだ。お弁当を食べる気力もない。

「斉藤君、大丈夫？」

「ああ何とか・・・」

猛にとつてあゆみの優しい言葉だけが唯一の安らぎだった。洋平も吹雪も衛も翔太も体中シツプだらけになって寝込んでいる。

相次いで午後の種目のメンバー変更が発表された。もちろん綱引き組が休憩を要するためだ。本来なら午後2から3種目出場予定だった綱引き組は最終種目の騎馬戦一本に絞られ、代わりにほかのメンバーに代役を頼むことになった。あゆみも当初ダンスとリレーだけだったのが、障害物競走とフットサルを追加された。

「悪いな、高崎さん。俺らの分まで任せちゃって」

「いいよ、気にしないで。私も頑張ってくるから応援しててね」

「おう」

笑顔であゆみが出場者の集合場所に向かったのを見送ると、猛の前に生島団長が現れた。

「えーと、斉藤猛君だったよな？」

「あ、はい。団長、何か用ですか？」

「ああ。ちょっと付いてきてくれるかな？」

「はい」

猛は痛む身体を起こして立ち上がり、言われるがまま団長の後を付いていった。誰もいない男子トイレ。そこで団長の足はぴたと止まった。今まで毅然とした態度で決して緩みを見せなかった団長の顔から笑みがこぼれた。

「どうして俺が呼び出したか、わかってるよな？」

「え？」

「隠さなくてもいいぜ。俺も真由子さんにはお世話になってる身だから」

「え、真由子さんを知ってるんですか？」

「知ってるも何も彼女は俺のいとこだ」

その言葉に衝撃を受けずには要られなかった。彼女にいとこがいたなんて初耳だ。まあいてもおかしくはないが、彼女はそんなことこれっぽっちも言わなかった。この力のことを誰にも言うなと口止めされていたから、てっきり猛は自分以外誰にも話していないと思っていたのだ。

「だからさつき力を？」

「ああ。俺はお前と違って生まれたときから力をコントロールできる。真由子にそのこと初めて話したとき驚いたよ。どうやら俺らの家系は力の素質があるらしいな」

「・・・・・・・・」

猛は生島団長の次の言葉を待った。元々頭の悪い猛には理解しがたい現実だった。こんな力が存在すると真由子から聞いただけでも驚いたのに、生まれたときから使えたというのである。もちろんこの力の存在は認める。今まで散々使ってきてそのすごさは実感していた。

しかしなぜこんなことができるのだろうと不思議に思わなかったのだろうか。みんながみんな願いが叶ったら世の中おかしくなるんじ

やないか。生まれたときからコントロールできる人がたくさんいたらと思うとぞつとした。

一瞬の沈黙の後、団長は猛の顔色を窺いながら話を続けた。

「でだ、単刀直入に言う。次の騎馬戦、お前も力を使え。力を使って勝って来い」

猛は耳を疑った。そんなことまでして勝って嬉しいのか。怖いと思いながらも団長の気合のすごさに尊敬しかけていた。それだけにこの言葉にはシヨックを隠しきれなかったのだ。

「どついう意味ですか？そんなことまでして勝って嬉しいんですか？見損ないました、失礼します」

猛は我慢しきれずに団長から逃げ出し、校庭側に走り出してしまった。

「やれやれ、ちよつと言い方が悪かったかな？」

「そうね。ちゃんと猛君の力を見たいって伝えなきゃ」

「しょうがねえ。ちよつと手荒いがあの手でいくか」

ピツ。携帯電話片手に団長と真由子の声があったことなどもちろん猛には知る由もなかった。

猛が校庭の応援席に戻ってくると、ようやく体力が回復してきた洋平たちがあゆみの応援をしていた。丁度障害物競走が始まるところだ。猛が席に腰掛けると、洋平たちが話しかけてきた。

「何やってたんだ？遅かったじゃねえか」

「で、団長は何て言ったの？」

「いや、・・騎馬戦絶対勝てよって」

「はは、団長らしいな。ま、とにかく高崎の応援しようぜ」

「ああ」

あゆみは頑張った。精一杯頑張った。忘れかけていたが、彼女は元々運動神経抜群だ。かわいい顔とは裏腹にあれよあれよという間に障害物を潜り抜けていく。持ち前の行動力を生かし、1位でゴールした。

その後もあゆみはフットサルでDFとしてゴールを常に守り、ダンスで華麗な舞を披露し、リレーでは走者1位で通過。そんなあゆみの頑張りもあってか最後の男子騎馬戦を前にして3組は3点差で1位に立っていた。

「すげえじゃねえか、あゆみ」

「本当にすごいよ」

「えへ、ありがと」

照れくさく笑う彼女の表情が久しぶりにまぶしく見え、この頃にはすっかり綱引きの疲れも吹き飛んでいた。

「おーし、次は最終決戦の騎馬戦だ。気合入れていけよ」

団長の掛け声が入る。しかし猛はさっきのことがあったためか素直に団長と意気投合できずにいた。

最後の種目、騎馬戦。4人一組の戦士たちによるクライマックス。全クラス一学年一チーム、全十五チームが一度にてっぺんの八チマキめがけて優勝を争う。

猛が上に乗る、洋平と衛と翔太が支える側に回る。昔馴染みの最強チーム。負けるわけにはいかない。ただ猛は絶対に力は使わないとも心に念じていた。

ドンツ。始まりの合図が鳴った。一斉に選手たちが飛び出す。団長率いる3年3組チームは始まると同時に次々と八チマキを奪う。力を使っている形跡はない。猛はそれを見てさすが団長だなと感心した。

猛たちも負けじと敵地に向かっていく。生来の荒っぽさから怖気づく相手の八チマキを剥ぎ取る。吹雪やあゆみ、そのほか3組の女子や参加してない男子の声援に後押しされて力がみなぎる。敵が倒されていく瞬間はあつという間だった。

気がつくと戦場には団長率いる3年3組と猛たちの1年3組、それに3年4組と菊池のいる1年4組の4チームだけとなっていた。

「やっぱり相手はこいつらだけみたいだな」

「いつまで経ってもライバルってやつか」

「よしいくぞ、お前ら」

生島団長の叫びとともに両者がぶつかり合う。猛たちは当たり前負けした。土台になっていく衛の足が揺らぐ。一番力のある翔太が態勢を立て直そうとする。

猛は傾きながら団長が八チマキをもぎ取り勝ったことを理解した。団長は終わってからこっちを見ている。

その後は何が何だかわからなかった。宙に浮いているような気分だった。猛の身体はひとりで動き出す。願いをこめたわけでもないのに力が発動する。間一髪、相手の八チマキを奪い取ると、菊池が地面についた数秒後、猛たちの馬も崩れ落ちた。

「うううう・・・」

目が覚めると、窓の外はあたり一面真っ暗だった。なぜ自分がここにいるのかもわからない。ただそこが保健室だということはすぐにわかった。目の前には洋平、衛、翔太、あゆみ、吹雪の姿が見えた。

「斉藤君、大丈夫？」

「あの落ち方はすごかったもんな。気を失っても無理ねえよ」

「ごめんな。俺が態勢崩したばかりに。明日は代休だし、思いつきり休めよな」

どうやら猛は騎馬戦の後、地面に崩れ落ちて気を失いここに連れられてきたらしい。猛は疲労で全身に痛みがあり、この日はみんなに肩を貸してもらって帰るのがやっとだった。

帰宅すると深い眠りに入っていく、翌日の代休は遊びにいくどころか身体を動かすことすら間々ならない状態。そんなとき忘れかけていた真由子からの電話が鳴り響いていた。

第五章

第五章 動き出すとき

？。携帯の着信音が鳴り響いた。真由子だ。メモリーに登録してある名前にそうくつきりと書かれていた。重い身体を抱き起こし、通話ボタンをプッシュする。

「はい、もしもし。真由子さん？」

「猛君？連絡遅れてごめんね。ようやくあなたに動いてもらうことがまとまったわ。これから話したいんだけど、今からこの間の喫茶店に来れる？」

「いや、それがちょっと昨日の体育祭で張り切りすぎちゃって・・・」

「・・・、憲二の言う通りまだ強情に力を使わないなんて言ってるみたいね」

「わかってます。真由子さんがやるうとしてしていることには共感しているんで、そのことには力は使います」

「うん、それはしてもらわないと困るわ。そう思うなら自分で疲れを取って今すぐに会いに来て欲しいの」

「え？」

「・・・、やっぱり知らなかったのね。力を使えば体力や傷を治すくらいいけないのよ」

その言葉を頼りに力を込めて願いをかけると本当に見る見るうちに力が回復していく。あつという間にピンピンの状態になった。猛は電話を切ってそのまま階段を駆け下り、駆け足であの喫茶店まで直行した。

喫茶店に着くと真由子さんの隣に一人の男性も一緒に座っていた。

生島団長だ。あの敵かで暑っ 苦しい団長が笑顔で猛を迎い入れる。

「おー、猛君。元気か？」

「団長が何でここにいますか？」

「何でってそりゃいとこだから。というのは冗談で、本当は俺も呼び出されたのさ」

猛は何のことかわからず首をかしげて真由子の顔色を窺った。

「憲二君にも力があるのは知ってるでしょ？ 創造主として活動してもらうんだもの、協力者は多いほうがいいじゃない」

「昨日は悪かったな。騎馬戦のときお前の力を見るために俺がお前に無理やり力を使わせるよう力を使っちまって」

薄々気がついていたが、やっぱりそういうことだったらしい。それにしても力を持つ者同士で力を使った場合、自分より力の弱い者にしか力が効かないと真由子から教えられていた。団長の力は間違いないく猛のそれを上回っていることは疑いようもなかった。

「それじゃ、ここからが本題。猛君、もしあなたが創造主になつたとして何をしようと思う？」

「え、えーと・・・自分のために幸せを願うとか。例えばお金が欲しいとか恋人が欲しいとか世界的な大富豪になりたいとか・・・」

「確かにそれもあるわね。でも私がやりたいのはそういうのじゃなくともつとおつきいことなの」

「おつきいこと？」

猛の頭脳ではそこまで頭が回らなかった。これ以上に大きな願いなんてあるんだろうか。不思議そうに猛は彼女の声に耳を傾けた。

「そう。人はいつの時代も欲望なしにはいられない。なぜだと思っ？ それはどんなに頑張っても叶わない夢があるからよ。叶わない夢があるから人はそれに向かつて努力する。それが生きがいでそれがなくなつちやったら生きる希望を失うって言う人もいる。

だけどそれは叶わない人の言い訳に過ぎないのよ。全部の夢が叶ったのならまた新しい夢を見つけて、また夢を掴んでの繰り返し。夢

に終わりはないわ。人は夢を追いかける瞬間が生きがいなんじゃないわ。夢を見るのが生きがいなんですもの。

夢が叶った人はいい。でも叶わなかった人は欲望のままに壊れていくわ。犯罪を犯す人も結局は欲望が叶わなかったために仕方なく犯す行為なのよ」

猛は何だかわかったようなわからないような気分になった。つまり彼女は何か言いたいんだろう。誰もが夢の叶う世界に希望なんてあるのか。無気力なときを過ごしてきた猛にとってそこが大いに疑問に映った。

「つまりよ真由子、どうということだ？俺にもよくわかるよう説明してくれよ」

「あ、ごめん憲二君。また私の世界に入っちゃったみたいね。つまりはこういうこと。私はみんなの願いが届く理想郷を作りたいの。そのために猛君たちみんなの協力が必要なのよ」

「でも、誰もが夢の叶う世界なんて可能なんですか？第一本当に希望が持てるのかもわからない・・・」

「確かにその意見はごもっともだわ。相反しあう願いがあったらどちらを優先するか。みんながみんな総理大臣になつたんじゃないしね。夢は一人一人違うもの。でもね、それが絶対に叶わないなんて方が希望の持てない世界になつていると私は思うわ」

「で、真由子の言いたいことはわかったけどよ、俺たちに何をしろって言うんだ？」

「そうね。そこでこれを見て欲しいの」

真由子はテーブルの上にA4ほどの紙数枚を並べた。どうやらインターネットから入手した情報をプリントアウトしたものらしい。彩られたインク文字と写真が猛たちの目に焼き付けられる。

「この統計は殺人、強姦、強盗、放火の凶悪犯罪を犯しながらいまだ消息不明で逮捕状が出ている犯罪者の過去三十年間の推移よ。そしてこっちがその動機として考えられると警察やFBIが発表し

た調査書。

これを見ればわかると思うけど、動機として何らかの願いが叶わなかった人が9割。その大半を占めていることがわかるのよ」

確かにそこにははつきりとしたデータが裏付けられていた。それは猛や団長、頭の弱い者にも一目瞭然だった。

お金が欲しかった、人を殺してみたかった、彼女が好きだった、ブランド品がほしかった、友達がほしかった、自分の存在を知って欲しかった、認められたかった、注目されたかった……。

動機は様々だが、そこには全て何らかの願いがあったのだ。

「これでわかったでしょ。私のやりたいことはただひとつ。これらの犯罪者を探し出して願いを叶えてあげること。そのためにはまだまだ私たちだけでは人手が足りないわ。だからあなたたちには力をコントロールできる仲間を探し出してきて欲しいの」

「でもどうやって？」

「そうだけ。力を使っているところなんてそうそう見られるもんじやないからな」

「大丈夫。そう言うと思ってちゃんと調べてあるわ」

真由子は再びバックから資料を取り出しテーブルの上に広げた。猛と団長に一部ずつ資料が手渡され、その場で解散。搜索は明日からスタートすることとなった。

十月五日。代休も明け、搜索開始。

真由子から渡された資料には、彼女が調べた結果、この高校の中に2人の力を使える者のプロフィールが書かれていた。

2年5組の難波愛と3年2組の若林賢。団長と話し合い、猛は難波の担当になった。

朝のホームルームが始まる前。猛は2年5組の教室を訪ねた。

「あのー、すみません。難波愛さんっていますか？」

「あー何、君難波の知り合い？」

「ええ、まあそんなところですよ」

「愛ならまだ来てないよ」

「え、いつ頃来るかわかりますか？」

「さあ・・・、午後には確実にいるんじゃないかな？」

猛は放課後、改めて教室を訪ねた。しかしそこには難波の姿はなかった。

「あ、朝の子だよな？」

「あ、はい」

「一応愛に君のこと伝えておいたんだけど・・・」

「どこ行つたか知りませんか？」

猛はクラスの女子に文化祭実行委員の集まりに言ったと告げられ、教室へと急いだ。着いたはいいが中に入るわけにはいかない。教室の前でうろつろ、怪しまれないようにドアの前で彼女が出てくるのを待った。

ガラガララツ。ドアの開く音がする。話し合いが終わつたみたいだ。次々と生徒が出てくる中、目を凝らす。その中で茶髪で化粧の乗った、小麦色の肌に少しはだけた制服の着方をした難波愛を発見した。

「あ、難波さん」

「え？」

難波は猛の声に反応し振り向いた。

「あー、あんたでしょ？早紀が私のこと探してるって言ってた一年生の男の子って」

「・・・」

「やめて欲しいんだよね、こういうことするの」

「すみません。でも、どうしても君の力を貸して欲しくて」

「は、力？」

「そう。使えるんでしょ、願いが叶う力。ほら、願いをこめると掌に青白い光が出て・・・」

「何のこと？私、そんな力使えないよ。あ、もしかしてあれ？遠回しに私の気を惹こうとしているわけ？」

「そ、そんなんじゃない」

難波はおどおどしている猛の顔を覗き込み、嘗め回すように見してきた。猛の頬に彼女の紫色のマニキュアのついた長い爪が当たる。

「ふん、結構かわいい顔してるのね。斉藤猛君だったっけ？君の事は覚えておくわ。それじゃあね」

後ろに振り返りバイバイの合図を手で示すと、彼女は誰もいない廊下の上を颯爽と消えていった。猛はその姿を見て呆然と立ち尽くしていた。

ルルルルル……。真由子からのメールだ。

『捜査の方は順調に進んでる？』

君の追ってる難波愛の続報よ。

どうやら彼女はこの力を気付かずに使っているみたい。

こつこつという子はわがままに思い通りになると思ってることが多いから気をつけてね。』

今更言われてもと思いい、廊下の角を曲がったところで生島団長と偶然擦れ違った。

「あ、団長」

「あ、猛君。なあその団長って言うのやめてくれないか？もう体育祭は終わったんだぞ」

「あ、すみませんだん・生島さん。それで捜査のほうはどうなりましたか？」

「その様子だと猛君のほうは苦戦してるみたいだな。俺の方も一苦労さ。若林っていうのが生徒会長だよ。これがまた頭が固いんだ。世界平和のためにしか力は使わないとかだよ。体育会系の俺には理解できないね」

「そうですか・・・」

「猛君は難波さんだったよな？あの娘には気をつけるよ」

「え、どういう意味ですか？」

「あいつの性癖は半端じゃない。俺の後輩も担任の先生もあいつにやられたって話だ」

「性癖？」

「ま、猛君には関係ねえか。お前が女に持てる口じゃねえもんな」
笑い声が飛ぶ。猛はこの意味を正確には理解していなかった。これから起こることなど想像すらできなかったのだ。

翌日。いつものように教室で挨拶をする。ありふれた光景。明るい笑い声。何一つ変わらない日常のように思えた。ただひとつを除いては。

「ちよつと待って。何で難波さんがここに？」

「あら、おはよう猛君」

「おはよう猛。ん、何驚いた顔してんだよ？」

「だって何で2年生の難波さんが」

「は、何言ってんだ猛。難波は1年3組、俺たちのクラスメイトだろ？」

「そうだぜ。席だつてほらあそこに」

衛が指差す先には確かに彼女の席と思われる机があった。出席簿にも彼女の名前があるようだ。先生が出席を取ると、彼女も元気に返事をした。

何が何だか猛にはわからなかった。周りのみんなは自然に彼女と振舞っている。もしかして力を使ったのか？しかし彼女に力の自覚はないはずだ。こんな手の込んだ願いを自然に願うなんて果たして可能なんだろうか？猛は無い頭をいくら働かせても理解できなかった。

その日の昼休み。いつものメンバーのほかになぜか難波愛もいる。

「ギャハハハハ、何だよそれ」

「それでさ」

洋平たちが話している中に入っていけない。難波が何を企んでいるのかわからない。猛は洋平たちと離れ、あゆみと2人で昼食を食べている。やっぱりあゆみはかわいい。猛にとってこの瞬間が一番の至福のときだった。

とそこへ難波が立ち上がり、猛とあゆみの前で立ち止まった。

「ねえあゆみ、あんた猛君のことが好きなの？」

「え、何突然？」

顔を真っ赤にして照れながらあゆみは難波の言葉に動揺する。

「好きか嫌いかって聞いているの」

「すごい剣幕で迫ってくる難波にあゆみは少しびくつきながら、

「好きとか嫌いとかじゃなくて、その、友達。そう、一番頼れる友達かな」

この言葉を聞いて猛は少しがっかりしたが、2人の様子をじっと見つめている。

「友達？それじゃいいんだよね、私が近づいても」

「え、それってどういう？」

「好きだってことよ。私は猛のことが好き」

「！ちよつと何言んだ、冗談だろ」

思わず首を突っ込んでしまった。からかっているのか。それとも本気なのか。彼女の考えていることがさっぱり見えない。

「冗談じゃないわ。その証拠を見せてあげるわ」

難波は猛の顔を見つめた。その瞬間催眠術にかかったかのように猛の身体は動かなくなつた。彼女の掌からは微かにあの青白い光が見えた。力を使っているのか。彼女の顔が徐々に近づいてくる。

彼女は唇を突き出し、抵抗できないことをいいことに猛の唇を奪つた。口づけなんて生易しいもんじゃない。濃厚に舌を絡めたディープキス。されるがままに奪われていく自由は完全に彼女のものになつていた。

糸を引きながら長いキスの後、漸く彼女は唇を離した。

「どう？これで冗談じゃないってことがわかったでしょ？」

ボタンツ。あゆみはその場を立ち上がり屋上のドアめがけて駆け抜けていく。猛は難波の身体を振りほどき、あゆみの後を無意識のうちに追っていた。

あゆみは1階の階段の下にいた。猛は踊り場に立ち彼女に叫ぶ。

「高崎さん！」

「来ないで」

「あれは誤解だよ。俺、難波さんのことなんとも思っていないから」

「でも・・・、でも気持ちよかつたんでしょ？彼女とのキス」

「そ、そういう問題じゃないだろ？」

「そうよね。私は斉藤君の彼女でも何でもないんだし・・・」

「ちよっと、何言ってる・・・」

「わ、私、斉藤猛君のことが好き。猛君のことが好きで好きでたまらないの」

衝撃の告白だった。彼女は精一杯の勇気を振り絞って顔を赤らめながら俺の目を見つめている。嘘偽りのない素顔。彼女が冗談でこんなことを言う人ではないことは猛が一番よくわかっている。

確かに以前猛は力で彼女が好きになっってくれるようにと願いをかけた。

しかしどんなことであるにしろ、一度願いが叶うともう一度願わなければ効果は続かないと真由子に教えられていた。あのときの願いは友達になっってくれたとき効果が切れている。それ以来力で願いをこめたことはない。紛れもなくそれはあゆみ自身の本心なのだ。

突然のあゆみの告白にどうしていいのかわからない。猛とあゆみがしばらく固まっていると、後ろから女性の声が聞こえた。

「ははーん、そういうこと。やっぱり好きなんじゃない、猛のことか」

難波が上から鋭い目つきで2人を見下ろす。その声に反応し、猛は後ろを振り返って彼女の顔を見た。するとあゆみの口から、

「何、悪い。そうよ、私は猛のことが好き。だからごめん、あなたには諦めて欲しいの」

「・・・ふん、何が諦めて欲しいよ。あんたちよつとかわいいからっていい気になってんじゃない？ネコかぶってぶりっ子しちゃってさ」

「私、ネコなんてかぶってない。ぶりっ子なんかじゃ・・・」

「それじゃあそれを証明して見せてよ」

「え？」

あゆみが目を見開いた。難波が猛のほうに目をやると、猛の身体は自由がきかなくなつた。足が勝手に動き出す。階段をドンツと蹴り上げる。猛の身体は宙を舞い、あゆみめがけて倒れこんでいた。

マウントポジション。あゆみの身体が下になり、猛の身体が上に重なる。まさにプロレスで見た光景だ。

バチツバチツバチツ。猛の身体は難波に操られたままあゆみの制服のボタンを引きちぎつた。

「難波、やめろ。やめてくれー！」

声にならない心の叫びが猛の脳裏をかすめる。

あゆみは目を瞑つたまま歯を食いしばり目線をそらしている。「やめて」と小さくかすれた声が胸に痛い。

あゆみは上半身下着が見え、Yシャツのボタンは全て飛び散っている。難波の力により猛の手が彼女のスカートに手がかかる。半分ほど脱げ、純白のパンティーが見えたそのときだった。

バシッ。あゆみの平手打ちが猛の顔面めがけて炸裂した。猛の身体が解放される。あゆみは猛の身体を拒むように抱き起こし、立ち上がる。

「ごめん、その何て言っているのか。でもこれは俺の意思じゃなくてその・・・」

「猛君がこんな人だとは思わなかった」

あゆみはその一言を残し、制服を手にとると、走り去っていった。彼女の目にはうっすら涙がこぼれているように見えた。

猛は重くのしかかる彼女の言葉にショックを受けながらも、後ろを振り返り難波の目を睨んだ。

「どうしたの、そんな怖い顔しちゃって。よかつたじゃない。彼女の愛は本物じゃなかったのよ。だってそうでしょ？本当に好きな人から迫られたら素直に結ばれたいと思うもの」

「てんめえ！」

猛は一発ぶん殴ってやりたかったが、どんな理由があれ女を殴ることはできなかった。何もできない自分が悔しくて悔しくてたまらなかつた。猛は自然と涙を流し、しばらくじっとしたまま動けなかつたのだ。

第六章

第六章 妄想する女

その日あゆみは猛と一言も話そうとはしなかった。それどころか避けられていた。その影響から猛はまた再び昔の無気力状態に陥っていた。

「どうしたんだよ、猛。さっきからため息ばかりついてさ」

「俺たちに話してみろよ。俺たち、友達だろ？」

「そうだよ。どうせあれでしょ、あゆみと喧嘩でもしたんでしょ。さっきからあゆみ、猛のほうを見ては何か避けてる感じがするし」

「……」

「……図星みたいだな。何があったのか、言ってみろよ」

「……あゆみに告られた」

「え？ やったじゃん。でもそれなら何で落ち込んでんの？」

「その後ビンタ食らった」

「は、何で？」

「俺があゆみを襲っちゃった」

「おいおいそれじゃあおめえが悪いよ。いくらなんでもそれはやりすぎだぜ。いくら好きな相手でも順番つてもんがあるだろ？」

「そうですね。今すぐ謝った方がいいですよ」

「違うんだ、俺の意思でやったんじゃない。全てはあいつが……」

「あいつがなあに？」

「うわあー！」

猛は椅子から転げ落ちた。後ろから難波が現れたからだ。慌てながらも猛は彼女に啖呵を切った。

「お前なあ、お前のせいで俺はあゆみを……！」

猛は難波の胸倉を掴んだ。

「なあに、私まで襲うつもり？」

「うう……」

猛は怒りをぶつけながらも動けなくなった。手にかけていた胸倉を離し、椅子を戻して座りなおす。

「あ、そうそう。みんなに報告がありまーす」

「報告？」

「そ。私たち、付き合うことになりました。パチパチパチパチ」

猛は思わず固まった。洋平たちは耳を疑っている。「俺と難波が付き合うだって」。そんなことありえない。そんな約束をした覚えはなかった。

一瞬の沈黙の後慌てて吹雪と洋平が声をかける。

「おめでとう、猛」

「おめでとう。なあんだ、高崎から難波に乗り換えてたのか。それならそうと言えよな、水臭いぜ」

「いや、そんなんじゃ……。おい難波、いきなり何言ってるんだよ」

「あら、いいの？私の力が欲しいんじゃないの？」

「うう。でもそれとこれとは別問題だろ？」

「あらそう。だったらいいのよ、力は貸さないから」

猛は確実に弱みを握られてそれ以上言い返す言葉が出なかった。

そんなときガラガラつと窓の開く音がした。

「おーい猛君、猛君いるか」

その声は生島だった。話に夢中だった猛たちはその声の大きさに注目した。

「団長！」

「おう洋平君だったけか。久しぶりだな。それにしてもお前にまで団長と呼ばれるとはな」

「すみません。にしてもいつの間にか生島先輩と猛は仲良くなったんですか？」

「え？ああ、あの体育祭のときからな」

「ふーん、猛と先輩って同じ体育会系だもんね」

「まあそんなとこかな。ということで、猛」

「あ、はい。・・難波さん、もう一度言っておくけど、俺はお前と付き合う気はないからな」

そついい残すと、猛は生島とともに教室を後にした。

廊下に出て連れられた先には一人の男性が待っていた。3年の若林賢君だ。なるほど、生徒会長だけあって利口そうに見える。猛や生島とは違う世界にいる人間。そんな雰囲気は漂っていた。

「はじめまして、若林賢です。君が猛君だよな？これからよろしく」
「あ、はい。こちらこそよろしく」

その丁寧な挨拶には好感が持てるも、この手の人柄の人に慣れていないためか、何だか調子が狂う。

「いやー、苦労したんだぞ。こいつ、そんなことには協力できないの一点張りで」

「全ての人への欲望が満たされた状態で生きがいを持てるのかが不安だったからね。僕は全ての犯罪者がいなくなっても犯罪はなくならないと思っているから。だってそうだろう、犯罪に動機なんてない犯罪者になんで犯罪をしたのかって聞いても正確には答えられないんだよ」

「な、ずっとこんな調子だったんだよ。だから強引に真由子のところ連れてったんだぜ。そしたらこいつ態度が一変してさ」

「真由子さん、最高です。あの人の下なら僕もついていってもいいと思いました」

どうやら若林は真由子に惚れたらしい。このウキウキした表情を見てすぐにわかった。顔にすぐ出るタイプなのだろう。

「まあそれはいいとして、猛君のほうはどうなんだ？何かあのわがまま娘に振り回されてるみたいだけど・・・」

猛は簡単にその場でこれまでの出来事を話した。生島は黙ったまま耳を傾けている。

「そっか。やっぱり難波は後輩に聞いていたとおりの奴みたいだな。」

そしておそらく難波は妄想癖がある」

「妄想癖？」

思いもしなかった、妄想だなんて。体育会系の猛には縁のない言葉だ。テレビのバラエティ番組やドラマでそういうのがあることは知っていたが、実際になつている人を見るのは初めてだった。

「さつき若林と話してたんだ。俺にとっちゃ何のことだかさっぱりだが・・・」

ゴホンツ。傍で聞いていた若林が一回咳払いをすると話に入ってきた。

「妄想癖・・・。僕も生徒会長の身だからね、難波さんのことも聞いているよ。彼女は好きになつた男子生徒や先生に今まで散々ストーカーみたいな行為をしている。家に押しかけたり強引に迫つたり・・・。」

そのときは信じられなかったけど、みんな彼女に見つめられると身体が途端に動けなくなつて彼女の思うままに動いちゃうつて言つた。多分力を使つてたんだろうね。

彼女は思い切りが激しい。これは妄想癖と言つて間違いない。このままほつておくと大変なことになる」

「でもどうすれば・・・」

「とにかく彼女を避けるようなことをしちゃだめだ。自分の思いが全て叶つてきた彼女にとって、叶わないと知つたとき何をしでかさかわからない」

「でもよ、ストーカーつて相手にしないことが大事つて言うぜ？」

「それは普通のストーカーの場合だ。今回は違う。力を何も知らずに何でも自分の思い通りになると思つてきた相手だ。それに僕には考えがある」

「考え？」

「そう、目には目を歯には歯をだよ」

何が何だかわからなかったが、猛と生島は若林の作戦に耳を傾けた。決戦は明日。ここから力対力のバトルのゴングが鳴り響こうと

していた。

翌日の放課後。猛はアメフト部の部室に難波を呼び出した。カチヤツ。入り口の鍵を閉める。

「どういうつもり？あ、もしかして本当に私に惚れちゃった？」

「・・・そうだって言ったらどうする？」

「本当？嬉しい、嬉しいよ。今までごめんね、意地悪して。でも悪気があつたわけじゃ」

難波は猛に擦り寄る。抱きついてきた難波の頭をなでる猛。

「愛・・・、何お前勘違いしてんだ？」

バンツ。猛は難波の身体を投げ飛ばした。

「いったーい、何すんのよ？」

「それはこつちのセリフだろ？人の恋路を邪魔しやがって。おい」

ガサガサツ。部室内に隠れていた生島と若林がカメラ片手に出てきて、猛の横に並んだ。

「本来こういう手荒な真似はしたくないんだけどね」

「しょうがねえだろ。こいつの腐った根性叩き直すにはこれしかねえんだから」

「生徒会長？それに生島先輩まで。どういうことなの？」

「生徒会に君から被害を受けたって相談がたくさん来てね。これ以上見過ごすわけにはいかないんだ」

「少々手荒かもしれないけど、自分で巻いた種だ、我慢するんだな」

「えっ？やだ、身体が勝手に・・・」

難波の身体がひとりでに立ち上がる。自然と彼女自身の手がセーラー服に向き、丁寧に制服とリボンを脱ぎ捨てた。もちろん猛たち3人が力によって脱がせているのだ。

「ちよつとあなたたち、どういうつもり？こんなことしたらただじゃすまないってことくらいわかってるでしょ？」

「ばーか、俺らには力があるんだよ。どうにでももみ消すことはできる」

「難波さんにはこのまま裸の姿をビデオに納まってもらおう。そうすればもう悪さはできない。そんなことをすればすぐにもビデオを公開するからな」

「ちよつと、やめて！」

そう言っている間にも徐々に彼女の服は自分の手によって脱がされていく。彼女の掌には青白い光が見えた。

力と力がぶつかり合っても力の強い者には無効化にされてしまう。必死に抵抗するが進行が遅くなる程度の効果しかなかった。

十分。力で彼女の自由を奪ってから十分の時間が経った。あつという間にストリップショーは進み、残りは上下の下着だけとなった。た。

「お願い、もう勘弁して」

強がりでわがままな彼女の臉にはうつすらと涙が浮かんでいた。何だか良心が痛んだ。しかし続けなくてはならない。

「そうだな、許して欲しいんなら僕たちの仲間に入れ。そして今まで被害を受けてきた人たちの全てを元に戻すんだ」

「そんなこと、できないよ今更。できるわけないじゃない」

この期に及んでまだ意地を張っている相手に対して猛が言った。

「もういいよ。どうやらこいつは一偏痛い目みないとわかんねえみたいだな」

「だな。で、どうする？」

「下を脱がそうぜ。女にとって下半身を見られるほど屈辱はねえだろ」

「いや」という彼女の潤む声を無視し、猛たちは力で押さえ込む。彼女の手がパンティーの裾にかかったときだった。

「ごめんなさい、何でもするから許して！」

さすがの彼女も折れたようだ。涙交じりの叫びが部室内に鳴り響いた。彼女にかかっていた力はその瞬間消えていた。

猛たちは難波の顔を見て笑みを浮かべた。

「ごめんな、騙すつもりはなかったんだけどよ」

「ま、これでおとなしく言うことを聞いてくれるでしょ」

「聞いてもらわなきゃ困りますけどね」

彼女はエツというような驚いた表情で呆然と立ち尽くしている。涙を拭いながら彼女は猛に尋ねた。

「どついうこと？もしかして演技だったの？」

「ああ、当たり前だろ？いくらひどいことされたからって女の子に乱暴するほどばかじゃねえよ」

「ひっどーい。私、本当に脱がされるかと思ったんだよ」

「ごめんごめん。でもさ、お前の方こそ悪いぜ。これに懲りたら何でも願いが叶うなんて思わないことだな」

「はは、そのセリフ、真由子が聞いたら怒るんじゃないか？あいつのやりたいことも同じようなことだしな」

「確かに」

「さ、早く服来てついてこいよ。お前も今から俺たちの仲間なんだからよ」

しゅんとした難波は無言で制服を着終わると、猛の後ろについていた。

「ねえ猛、これからどこ行くの？」

「真由子さんと会うんだよ。丁度全員そろったしな。喫茶店で待っててって連絡しておいたからもういるはずだ。誰かさんのせいで遅れちゃったしな。教室にあるバック取ったらそのまま直行するからな。逃げるなよ」

「はいはい、もう猛たちには逆らいません。すみませんでした。これでいいんですよ？」

相変わらず素直じゃない。大体全部清算しろといったのに未だに2年生ではなく1年生のままだ。まあ力の使い方がわからないんだから仕方ないのだが。

能力を取り消すには能力を使った本人が取り消さなきゃいけない。別の内容なら力の強い者が抑えることができるのだが、同じ願いは

そうはいかない。

教室でバツクを取り終えて音楽室の目の前を通ったときだった。「お疲れ様」の声とともに生徒がそろそろと出てきた。

「あつ」

猛の顔を見て声を挙げた女子がいた。あゆみだ。そのまま立ち去ろうとするあゆみの肩を猛は掴んだ。

「待って、高崎さん」

「なあに？またエッチなことするの？」

「違うんだ、誤解なんだ。その、なんて言っていていいかわからないけど、とにかくごめん。俺、許してもらうまで何でもする。何でもするから」

「……」

あゆみは黙ったまま猛の表情を窺っている。猛はその目線を気にしながら地べたに手をついた。無言のまま土下座をしたのだ。

「ちよつと、猛君、やめてよ。みんな見てるじゃない」

クスクス。音楽室から出てくる生徒たちが猛の姿を見て笑っている。あゆみも恥ずかしそうにあたふたしている。

「俺、高崎さんに許してもらえるまでずっとこうしてるから。明日も、明後日も、一週間後も、一年後も……」

「ちよ、ちよつと。わかった、わかったから」

「それじゃあ許してくれるの？」

「うん。ごめんね、私のほうこそ悪かったわ。あの時怖くなっちゃって。その、ぶつたりして。」

男の人ってどうしてもああいう気持ちになっちゃうんだよね？私から告白したんだもん。ちよつと大人気なかったかなって反省してるの」

「……あのさ、その告白の返事なんだけど……」

「え、あれはなんて言うか勢いで……」

「ううん、言わせて。俺もずっと前から高崎さんのことが好きでした。その、一度は振られたんだけど、付き合ってもらえますか？」

「はい、喜んで。今度こそ本当に恋人同士だね。改めてよろしくお願ひします」

まだ少し誤解を受けているようだったが、今はこれでいい。いずれわかってくれればとこのときは思い、彼女の笑顔を見て安心した。

「そうだ、俺たちはこれからは恋人同士なんだ」。そう思うと、何だか安心感が出た。

「ふーん、なあんだ。猛の方も高崎さんのことが好きだったのね。それじゃあ私には最初っから勝ち目なかったってことじゃない」

「あ、難波さん」

「ねえ、2人はもうキスとかしたの？」

「いや、したというか何と言うか・・・」

「これからいくらでもできるから。そんな恋人になっていきなり何て、ね？」

「う、ああ」

じれったい2人を見て難波は何か思いついたようだった。

「ねえ、私2人がキスしてるとこみたい」

「は、何言ってるんだよ。キスシーンなんて見せるようなもんじゃねえよ」

「そ、そうよ」

「そんなこと言わないでさー、ほらほら」

ガクンツ。2人の身体が沈む。難波の掌に光が差していた。彼女は力を無意識に使い、2人の身体を引き寄せる。自由の利かなくなつたあゆみは猛にささやいた。

「猛、いいよ。私たち、もう恋人同士なんだから」

その言葉に救われるように猛は自分の意志で彼女の唇を奪っていた。

第七章

第七章 危険な任務

いつもの喫茶店に猛と生島と若林と難波、それに真由子は座っていた。

「やつと全員そろったわね」

「でもよ真由子、一体何から始めるんだ？ 犯罪者を探し出して願いを叶えてあげるとか言ってたけど、犯罪者なんてそれこそ五万といるんだぜ。凶悪犯だけ見ても何人いると思ってるんだよ」

「そうですね。僕が調べたところによると、警察発表だけでも年間数十から数百万もの凶悪犯がいる。しかも殺人を除く強姦、強盗、放火は暗数も相当多いと聞いている。それらを全て洗っていたらいくらなんでもきりがない」

「暗数？ 何それ若林君」

「警察に把握しきれしていない数だよ。つまり逮捕できないけど実際に行われてきた犯罪数だ」

「ふーん」

真由子は若林と難波のやりとりで一呼吸置いて語った。

「もちろんその部分も考えてきたわ。今話に出た暗数こそがその答えよ。」

私たちが扱うのは警察で捕まえられる低レベルの犯罪者ではないわ。警察で捕まえられない凶悪犯罪者、それも組織犯罪者の根っこを叩くのよ。」

警察でそういった凶悪犯が捕まえないのは彼らの欲望がとてつもなく大きいからなの。欲望の大きさをゆえにそれを制御できないから犯罪を犯してしまう。」

「ただど本能のままに行われた犯罪は、警察が得意とする動機で事件

を洗うことができない。だから捕まえるのが困難だと言われているの。

だからその人たちの欲望を別の願いに置き換えてやれば犯罪は止まる。犯罪が潰されると知れば抑止力にもなるわ」

「なるほど、そうやって改心を誘うわけですね。さすが真由子さん」

「ありがと。犯罪っていうのは欲望が大きすぎて夢が叶わないと思つたときの代替行為として行うもの。欲望の強い凶悪犯を叩けば必ず誰もが夢の叶う世界は誕生するわ。創造主になれる日も近い」

「なーんか、真由子も相当妄想癖すごいよな。まるで誰かさんみたい」

「ちょっと、それどういう意味？憲二君たちこそ反省した方がいいんじゃない？私がおもひあの場合謝らなかつたらどうするつもりだったわけ？」

「いや、それは・・・なあ、猛」

「ああ、あれは謝ってくれろと信じてたから」

「なーんかはぐらかされた気がするんだけど・・・」

「でもさ真由子さん、その凶悪犯罪者のグループに当てはあるのか？警察で公開している指名手配犯ならともかく、警察にも捕まえられてないのなら僕たちで捕まえるのは難しいのでは？」

誰もが気になるところではあった。そうだ、警察にもわからないことなどインターネットですら調べることはできない。

暗数というのはほとんどが警察に訴えずに泣き寝入りしたケースか秘密裏に行われた犯罪だ。いくら力をコントロールできる5人が集まったところでどうにかできる問題ではない。

真由子は少し考えると、口を開いた。

「そのことなんだけど、調べていくうちに奇妙なことがわかったのよ」

「奇妙なこと？」

「そう。なぜかここだけこの1ヶ月犯罪が起きてないのよ。これがたまたまなのかどうかはわからないけど、日本全国、世界各地で犯

罪が起こって検挙されているのに、不自然だと思わない？」

確かに資料にあった地図の真由子が指差す横浜市鶴見区にはこの1ヶ月犯罪が1件も起こっていない。ここは日本でも有数の犯罪天国だ。同じ横浜市でもほかの地域は凶悪犯罪を含め数十件の犯罪が起きている。事実、2ヶ月前には犯罪件数は三十六件となっている。統計などよくわからない猛たちにもそのことは理解できた。

「確かに不自然だな。手がかりがこれしかない以上、当たってみるしかないな。丁度明日は土曜で休みだ。行ってみるか」

翌日。猛たちは手分けして住民に聞き込みを開始した。しかし誰一人おびえた表情で話を聞こうなんてしない。

猛たちを怪しんでいるのかもしれないが、それにしても一人百人以上聞いているのだ。一人くらい応じてくれてもいいはずである。

一日中八時間以上走り回ってもとうとう手がかりと言えるものを見つけ出すことはできなかった。

「もう午後の6時。そろそろタイムリミットね」

「結局何の手がかりもなしか。ただの思い過ごしだったのかもしれないな」

「帰るか」

そんな思いにひれ伏しているとき、難波がこちらに向かって走りこんできた。

「おー、難波。遅かったじゃねえか。もう終わりだつてよ」

「ち、違つたの。わかつたのよ、この人たちが人を恐れている理由が」

「え、本当なの？」

「うん。何でもここら辺で神隠しが頻発してるとかで」

「神隠し？」

「確かに神隠しなら理解できる。神隠しはほとんど暗数として扱われるからね」

「確か今日の7時から祭りがあるとか看板があつたぜ」

「それだ。行きましよう、生島さん」

午後8時。猛たちは神隠しに遭いそうな人がいないかと目を凝らして散策した。3手に分かれての行動。猛は難波とともに警戒しながら屋台の前を歩いている。難波の行動に少々振り回され気味だ。

「なあ、いい加減に食べるのやめろよ。肝心なときに動けなくなつてもしらねえぞ」

「何よー。あ、もしかしてあゆみさんと来たかったとか。そうよね、今日やっと恋人同士になったばっかりだもん」

「おい、今はそういう話じゃねえだろ？」

「ふふ、照れちゃつて。・あ、今の人」

「どうした？何か発見したのか？」

「あ、ただのナンパだった」

「・・・あのなあ。誰でも怪しめばいいってわけじゃ」

「あ、今度こそ本当に本当」

「え？」

はたから見れば好青年。おそらく二十歳くらいの女性に声をかけている。男は連れのもう一人の男とともに女性2人を雑木林の中に誘い込む。

「またただのナンパじゃねえのか？」

「ううん、違うよ。だってさっきもあの男たちおんなじ方向に女の子連れ込んだもん。だけど女の子の方は出てこなかった」

「さっきつていつだ？」

「二十分前。ここにきたときからずっと見てたもん。間違いないよ」

「でもさ、神隠しって普通小さい子とか労働者とか金になりそうな人をさらうんじゃないか？女の子なんてさらったところで何の金にもならねえじゃんか。人身売買は今の世の中では禁止されてんだぜ？そんなあからさまな犯罪なら暗数になるのかな」

「もうこれだから嫌よね。何でも決め付けてかかる人は」

「何だよ、俺は正論を言ったただけだろ？」

「とにかく追うよ」

猛は強引に難波に連れられて男2人を追った。物陰に隠れながらゆっくりと慎重に。難波の勘は当たっていた。雑木林に隠れてマンホールのふたが開いているのがわかった。男たちは平然と女性を担ぎ、中へと入っていく。この状態で真由子たちには連絡できない。猛と難波は2人で男を追うことになった。

「暗いね。それに臭い。ここには女の子はいないみたいだね」

「ああ。おそらく下水道から繋がる出口に運び込んでるんだろう。慎重に行けよ、ばれたら厄介だからな」

「はい」

そおつとそおつと下水道の中を進んでいく。猛がマンホールのふたを開けた。真っ暗な空が顔をのぞかせる。

「おし、着いたぞ」

猛が難波の顔を見た。そのときの難波の表情は青ざめたものだった。

「猛、前」

「えっ？」

ドンツ。猛は男に殴られ、気を失った。男たちは待ち伏せしていたのだ。

「おい、その女も出て来い」

言われるがまま難波は地上に出た。男たちは難波にナイフを突きつける。

「おい、何で俺たちをかぎまわっていた？」

「それは・・・」

「言え、言わねえとこの男ともどもお前も東京湾に沈めるぞ」

難波は言葉も出さず両手を挙げて降参のポーズを取っている。するともう一人の青年の方が声を挙げた。

「ちよつと待つてください、清吉さん。殺しちゃうのはもったいなくないですか？この女、よく見れば結構まぶいですよ。大切な商売道具になるんじゃないですか？」

「でもよ、俺たちのことばれちまっただぜ。生かしておくわけに

は・・・」

「やつぱり人身売買が目的だったのね」

「お、まだこの状況でしゃべる気力があつたのか」

「どうします？ボスのところにぶち込んでおきますか？」

「そうだな。生かすにしても殺すにしてもボスが決めることだろ。」

おい、連れてけ」

青年が難波の腕を引っ張り連れて行くとした。このとき難波は願っていた。助かりたいと。心から願った。

その思いが届いたのか、彼女の掌から光がこぼれる。ボオオオオ・。難波の周りに突風が吹き荒れ、男の持っていたナイフがはじかれ、男たちは吹き飛ばされる。

「そっか。力つてこうやって使うんだね。やっと気付いたよ」

「何だこの女。何かおかしいぞ」

「こないかかれた女、今すぐやつちまいましょうよ」

「そうだな、ほかに女は腐るほどいるんだし、これくらいしても怒られないよな」

男2人は素手で難波に襲い掛かる。しかし力を使った彼女の敵ではなかった。力によって高速を手に入れた難波はいとも簡単に男2人の腕を掴み、左手で額を掴む。

左手から男を倒したいと願ったことで放たれた衝撃波が男に脳震盪を起こさせた。もはやこうなると男たちは戦意喪失。立つことすらままならなかった。

「あんたたちのボスはどこ？」

尋ねられた男は雑木林を抜けた道路沿いにある大豪邸の場所を示した。彼女におびえてなす術ない状態だ。難波は猛に回復の願いをかけると、2人で豪邸まで向かった。

その先にはボスと思われる小太りの中年男と用心棒と思われる長身のスーツ姿の男2人、連れ去られていた女性たちが横たわっていた。

「あんたがこの事件のボスね」

「なんだ、あいつらもうやられちゃまったのか。こっちは高い金だして雇ったというのに何たるさまだ」

「もうおめえらの悪事はばれたんだ。観念するんだな」

「そうはいくか。おい平次、新太郎、こんなガキどもさっさと始末してしまいな」

平次と呼ばれた用心棒がナイフ片手に猛に向かって襲い掛かってきた。猛は力を使い、動きを止め、思いつきりボディーブローを願いをこめて浴びせる。平次はその場で前のめりに気絶し、倒れた。

新太郎と呼ばれる用心棒は素早い動きで難波に襲い掛かる。しかし猛以上に力の強い難波の敵ではなかった。男は願いにより後ろに吹き飛び壁に激突、気を失った。

「どいつもこいつも役立たずな奴らだ」

「さあどうする？降参するか？」

「わかった。降参だ、降参」

そう言って握手を求めたその瞬間だった。ボスは隠し持っていた拳銃を素早く取り出し、引き金を弾いた。力で止めようとするが間に合わない。

ドンツ。目を瞑っていた猛には何が何だかわからなかった。ただそつと目を開けるとそこには猛の前に出て息遣い荒く立ち尽くしている難波の姿があった。難波はその場で崩れるように倒れた。見ると大量に血を流していた。銃弾が命中したのだ。

「てんめえ！」

猛はすぐさま力を使いボスをぶちのめした。ボスは泡を吹きながら気絶。完全に伸された。

「おい難波さん、大丈夫か？どうしてこんなことに・・・」

「だって・・・、猛を・・・守りたかつたんだもん・・・今でも・・・」

私・・・猛のこと諦めてないんだからね・・・ごほつごほつ」

「わかった、もういいしゃべるな。俺が力で何とかしてやるから」
猛は全ての力を振り絞り絞り彼女が助かりますようにと願った。その

思い通じたのか、何とか一命を取りとめ病院に運ばれたのだった。

第八章

第八章 見えざる敵

難波は総合病院に入院することになった。全治2ヶ月。そのダメージから彼女の力は戻らず、意識も戻らない状態が続いていた。

「くそつ、俺のせいだ。俺がもっと注意していればこんなことには」「そんなことないわ。私のミスよ。凶悪犯がこれほどまで力を持つてるなんて想像できなかった。おかげで一人の戦力を失ってしまつた。おまけに猛君も力を使いすぎたせいではらくは使えない」

「ま、よかつたじゃねえか。猛君はしばらく休め。その間は俺たち3人が何とかすつから」

「そうだね。力が使えないんじゃないかもっと危険な目にあつても不思議ない。僕たちだけで行動した方がいいだろう」

「そうね。力が回復するまでは通常の学校生活に戻ってちょうだい。何かあつたら連絡くれればいいから」

「ああ、ありがとう」

猛は気が気でなかった。自分のせいで危うく一人の人を死なせてしまうところだった。今も彼女は意識が戻らない。真由子たちは気を使ってくれたが、猛にはどうしても悲觀的に考えざるを得なかったのだ。

翌日。またいつもの日常生活に戻った。今までいろいろなことがありすぎて忘れかけていた日常だ。窓の外を見ながら感傷に浸っている猛に、洋平たちが声をかける。

「どうしたんだよ、そんな暗い顔して」

「そうだよ、らしくないよ。せつかくあゆみと恋人同士になれたんでしょ？もつと嬉しそうな顔しなよ」

「ああ、そうだな」

「ねえ猛、放課後暇？」

「あ、うん」

「それじゃあ一緒に帰る。ちょっと一緒に行きたいところがあるの」
放課後、あゆみに連れられたところは学校の屋上だった。秋の夕暮れが顔を覗かせ、心地よい風に吹かれながら2人は立っている。背を向けたあゆみが大きく背伸びをする。

「うーん、気持ちいいね」

「うん」

「ねえ覚えてる？4ヶ月前、私猛にここで告白されたんだよね？あのときは本当にビックリしたよ。だっていきなり『付き合ってください』だもん。ほとんど話したこともなかったのにね」

「ああ、あのときはその、勢いで」

「でも今では付き合ってるんだよね、私たち。信じられないなあ、なんとも思ってたなかったあの頃を考えると」

「……………」

「でも今になって思うんだ。あのとき告白されてよかったなあってあのときの猛の行動がなければ私は猛とこんなに仲良くなれなかったし、いじめられて孤独のまま過ごしていた。こうして付き合うこともなかったんだもん。本当にありがとう。猛にはいつぱいいつぱい助けてもらった。何をそんなに悩んでるのか私にはわからないけど、これからは何でも言ってみてね。私、猛の力になるから」

「……ありがとう」

「それじゃあ帰ろうか。もうこんな時間だし」

彼女の言葉が嬉しかった。猛は救われた気がした。こんなにも自分に心を許してくれる人は洋平たち以外いなかった。難波のことで自分を責め続けていた自分が恥ずかしい。こんなにも自分を信じてくれる人がいるんだ。猛にとってこれほど心強いことはなかったのである。

文化祭も終わり、あたりは一面冬の様相を呈していた。木々は枯れ、北風が吹き荒れる。世間はもうじき訪れるクリスマスムード1色だ。猛の力も徐々に回復しつつある。難波は意識は回復したものの力のこと、事件のことに關して都合よく記憶から消え去っていた。いつの間にか彼女は2年生に戻ってもいる。まだ学校に来られる状態ではないが、年明けには復学できるといふ。

「でもいいよな」。猛は高崎さんとクリスマス一緒に過ごすわけだろ?」

「ああ、まあな」

「それだけじゃねえぜ。実はな、俺たちもその・・・」
洋平と吹雪が肩を組んでいる。

「まさか、洋平と吹雪も?」

「うん。何だか猛たちのこと見てる間にね」

「おめでとございます」

「ありがとう」

「まさか、これで残ったのって俺と翔太だけ?」

「そういうことになるな」

「くそー、俺も女欲しい。こうなったら2人でナンパしに行こう、な?」

「俺は今はいいです。女に興味ないですから」

「うっ。翔太まで・・・」

「まあそう焦んなよ。そのうち俺にも見つかるって、理想の女が」

「ふん。そういうことを彼女がいるお前に言われても惨めなだけじゃんか」

一人衛がふてくさされていると、会話の輪にあゆみが入ってきた。

「猛、一緒に帰ろ」

「あ、ああ」

「何だよ、結局アツアツだな、2人とも」

「どうしたの?」

「いや、なんでもない。こいつ、ひがんでるだけだから早く行こう

ぜ。これ以上こいつといるとづるさいからさ」
「うん、うん」

「ねえ、猛はクリスマスはどうするの？」

「え、どうするって・・・。そりゃできればあゆみと一緒に過ごしたいよ。だめなの？」

「うん、その逆。断られたらどうしようかと思って」

「なに余計な心配してんだよ。俺があゆみと一緒に過ごしたくないなんて言うわけないだろ？」

「うん、そうだよ。2人で盛大に楽しもうね。当日どこ行こっか？」

「そうだな・・・、考えとくよ」

「うん、楽しみにしてるね。それじゃあ」

猛はあゆみの家の目の前で彼女に手を振る。彼女の笑顔をしばらく見つめた後、逆方向の自宅へ足を進めていたそのときだった。

「きゃあああー！」

あゆみの声だ。猛は振り返り、彼女の家の玄関に走る。

「どっした？」

「うん、これ」

一通の宛名と消印のない封筒を渡された。その中には便箋一枚の手紙と数枚の写真が入っていた。猛はその内容を見て目を疑った。手紙には『この写真をばら撒かれたくなかったら、クリスマスイブに俺の彼女になれ』といった脅迫文が書かれていた。

「脅迫状？」

猛が封筒から写真を取り出した。そこにはあゆみの裸の写真が映っていた。すごく自然な表情をしている。無理やり撮られたものではないことはすぐにわかった。彼女が自分から撮らせるはずがない。盗撮されたのか？猛は脳裏を廻らせていた。

「猛、私怖いよ」

猛は彼女に「大丈夫」と言うと、犯罪性を感知して真由子に連絡し

た。

「これは合成ね。それにしても手が込んでいるわね」

いつもの喫茶店に座った猛とあゆみと真由子は紅茶をすすりながら脅迫状を見ていた。合成写真だと聞いて安心したのか、あゆみが口を挟む。

「合成、なんですか？それじゃあ犯人は・・・」

「一般に言われているストーカーという線が一番可能性が高いでしょうね。ストーカーは潜在化しやすいけど、動機は決まって自分のものにしたいという欲望。私たちが追ってみる価値はありそうね。猛君、もう力の方は大丈夫？」

「あ、はい。万全とは言えませんが・・・」

「それじゃあ捜査開始よ。私のほうから憲二君と若林君には連絡しておくから」

「ちよつと待って。あなた一体？」

「神田真由子。詳しいことは今は言えないけど、関わってしまった以上いざ話さなきゃいけないでしょうね。とりあえず探偵とでも名乗っておくわ。大丈夫、あなたは私たちが必ず守るわ」

「はい、お願いします」

翌日から捜査が始まった。住民による聞き込み捜査、あゆみに心当たりがないかなどあらゆる面からの調べだったが、なかなか犯人像は上がってこない。何より脅迫状以上の犯人の行動がなかったために、警察もまともに取り合ってくれることはなかったのだ。

十二月二十三日。脅迫状に書かれたクリスマススイブがあと1日に迫ろうとしていた。猛とあゆみはいつもの喫茶店に来ていた。そこには真由子と生島と若林もいる。

「それで何かわかった？」

「いや、それが何も。こうなったら当日に見張って現場を押さえるしかねえな」

「でもこれは本当にストーカーの仕業なんだろうか？」

「どういうこと、若林君？」

「どうも腑に落ちないんだよ。ストーカーって言うのはあまりの欲望のためにその相手に近づこうとするものはず。なのにこの二十日間、一度も彼女の前に姿を見せていない。合成写真で脅迫してまで溺愛しているストーカーが変じゃないか？」

「それじゃあ犯人はなんだって言うの？」

「ストーカーを装った愉快犯か、もしくは予告殺人か。それは僕にもわからない」

「彼女、いじめに遭ってたっていうしね」

「でも私、今はいじめはなくなりましたし、恨まれるようなこと、してません」

「でも人はどこで恨まれてるかわからない。調べてみる必要があるそうね。私は明日のプランを考えるから憲二君は学校内をお願い。

若林君は今まで通りに動いてちょうだい」

「俺も生島さんと一緒に調べます」

「いいえ、猛君は調査しなくていいわ。あゆみちゃんを守ってあげて。あゆみちゃんを守るのは猛君だけなんだから」

猛はその真由子の言葉に違和感を覚え、腑に落ちない思いがしたが、頷いて見せた。

翌日。十二月二十四日、クリスマスイブ。世間が仄かに賑わいを感じ始めている朝、猛が玄関を出ようとすると、電話が鳴った。

「もしもし、猛君？」

真由子の声だ。なにやら慌てた口調で話してくる。

「どうしたんですか、真由子さん？」

「憲二が昨夜、捜査中に襲われたわ」

「！え、それで？」

「以前混迷状態が続いてるけど大丈夫、命に別状はないみたい」
ほっと肩を撫で下ろした猛にさらに続報が入る。

「それだけじゃないの。若林君が昨夜から姿が見えなくて・・・」
「そんな・・・」

「多分あゆみちゃんを襲った犯人と同じだと見て間違いないわ。憲二君の教われた現場と若林君の捜査していた現場に手紙が残されていたのよ。写真はなかったけどあゆみちゃんに送られてきた手紙と同じ内容だね」

「・・・それじゃあ若林さんの言っていた通り、相手はストーカーじゃないのか」

「ええ、おそらくね。でも大丈夫。私一人でもあゆみちゃんを護衛するから。いい？勝手に動いちゃダメよ。私が行くまで動かないで。わかったわね」

「はい」

ピツ。電話を切ると、急いで猛はあゆみの家に走った。彼女のことが心配でたまらなかった。

嫌な予感がした。犯人の目的は一体なんなのか？そもそも単独犯なのだろうか？この間みたいに相手が力よりも先に行動してきたら勝てるのだろうか？そんな思いを廻らせながら猛は彼女の家の前へと辿り着いた。不安と希望が交錯しながらも、猛の人差し指はブザーの上を挿していた。

第九章

第九章 クリスマスイブ

「はい」
ドアの向こうにはあゆみの姿があった。どうやら無事だったようだ。こんなことになりながらもあゆみは笑顔で猛を迎えた。

純白のロングコートにピンクのマフラー、白と黒の縞模様熊のワンプイントが刺繍されたセーターを着て、山吹色のスカートを履いている。いつもより少しおめかしをしたあゆみがそこには待っていた。

「どう、似合う？」

「うん、とつても。それじゃあ行くっか？」

「うん」

真由子から強く自分が来るまで動くなどとは言われていたが、いざとなったら自分で命を懸けても守ると心に決めていた。少しだけならいいだろうと思い、猛は神奈川のテーマパークに誘うことにした。この油断が後々悲劇を呼ぶことになるうとはこのときは少しも思っていないかったのである。

「すっごい混んでるね」

「ああ。クリスマスだからもっと別のロマンチックなところに出かけるかと読んだんだけど甘かったな」

「ねえ、見て。クリスマス限定のショーがあるんだね。入ったら絶対これ見ようね」

「ああ、もちろん。今日はあゆみの好きなことをして過ごそう。嫌なことは忘れてさ。いざとなったら俺が命懸けで守るからさ」

「ありがとう。チュッ。誓いのキス」

「・・・」
猛は照れて真っ赤になってしまった。人に見られているところでキスされることほど恥ずかしいことはないと思い、猛は笑って誤魔化していた。

3時間並んで漸く猛たちは中に入ることができた。限定ショーを見てすぐに昼食。慌しい中今のところ何の動きもない。やはりただの愉快犯だったのか？猛はすっかり安心し、デートを満喫していた。「ね、おいしいでしょ？これ全部私がつったんだよ」
「うん、すっごくおいしいよ」

2人が仲良く食事をしているところへ一本の電話が入った。

「もしもし、猛君？」

「あ、真由子さん」

「何勝手に動いているのよ。あれだけ動いちゃダメだって言ったじゃない」

「ごめんなさい。つい・・・」
「ついじゃ済まされないのよ。彼女に何かあったらどうするつもり？」

「それは・・・でも、今のところ何も起こってないですから」
「そう、それはよかったわ。私も今2人に追いついたから」

真由子がそう言うのを見て辺りを見回すと、一人寂しくホットドックを食べる彼女を発見した。どうやら猛の携帯についている発信機を頼りにここまで来たらしい。「こっちで一緒に食べよう」と猛たちが誘っても犯人を刺激するといけないと拒んだ。

「私は彼女に危害を加えそうな人を見たらすぐにでも飛び出せるように見張ってるから、猛君たちは自然にデートを楽しんでいて。そのほうが犯人が行動を起こしやすいし、現行犯で捕まえないことには何の解決にもならないわ」

「わかりました」と猛は言い、電話を切った。犯人の出方を見ておびき出す。作戦は決まった。猛たち3人には自然と緊張感が走っていた。

昼食を食べ終わると、ジェットコースター、コーヒークップ、巨大迷路といった定番のものからメリーゴーランドやお化け屋敷まで子どもに帰って楽しんだ。大変な混雑でそれほど多くのアトラクションに乗ることはできなかったが、どこからどう見てもそれはデートでしかなかった。犯人の行動も全くないまま2人は夜の観覧車へと乗り込んでいた。

「結局なんでもなかったのかな？」

「そうね。結局何が目的だったかわからない。憲二君を襲ったのも若林君をさらったのも別の犯人だったのかしら？」

「そうかもしれないですね。もう一度調べるしかないですね」

「というか、何で真由子さんまで一緒に乗ってるんですか？」

「あ、ごめん。私はもし観覧車で襲われたら大変だと思って。気にしないで、いいのよ、言ってくればあっち向いてるから猛君に抱きついて」

「……………」

あゆみが機嫌を損ねたまさにそのときだった。ガタンツ。急に観覧車に大きな揺れが起こり、停止した。

「な、どういうことだ？」

「いったーい」

「大丈夫か、あゆみ？」

「うん、何とか。．．．それより手」

見ると猛の両手はあゆみの胸をわしづかみしていた。猛は真っ赤になって胸から手を離す。

「ご、ごめん」

「もう、順序ってものがあるでしょ」

「それより下を見て」

猛とあゆみが下を覗き込むと、黒づくめで覆面をかぶった3人組の男が観覧車の入り口に立っている。彼らの身体から大量の青白い光が放出されていた。

「あれは、まさか力？」

「ええ。前から気になっていたんだけど、力は別に掌以外からでも力が放出されるみたいね。難波さんもどうやら目から放出するタイプだったみたい」

「でもあれだけの量を一偏に放出できるなんて・・・」

「どうやらあの男たちがあゆみちゃんを狙っている犯人みたいね」
「そうみたいだな」

男たちは猛たちの乗る観覧車をじっと見つめている。目があった瞬間、猛たちの身体が瞬間移動した。気がつくと、猛たちは男たちの目の前に立っていた。周りの人々は止まっている。どうやら力により猛たち以外の人の時間を止めたらしい。

「何者だ、おめえら」

「おうおう、威勢のいい兄ちゃんだな。俺たちはちよつとそっちのお嬢ちゃんに用があるんだよ。邪魔しないでくれるかな」

「何が目的？彼女を誘拐してどうするつもり？」

「どうするつもりって言われてもなあ？」

「ああ。俺たちはただボスに雇われてる身なんで詳しいことは知らねえのよ。ただ彼女を連れて来いとしか訊いてないんでそれしか言えねえな」

「ボス？それじゃああんたたちはそのボスに力を解放されたって言うの？」

「力？ああ『GOD OF DESIRE』のことか。そこまで知ってるとはあんた、ただものじゃないね」

「どうしてもあゆみを連れてくつてんなら俺たちを倒してからにする」

「お、威勢がいいね。こつちも嘗められたもんだな」

「おしおめえら、やつちまえ」

力と力のぶつかり合い。猛と真由子はあゆみを守るために力を使う。あゆみは恐る恐る2人の陰に隠れながら見守るしかできなかつ

た。

勝負は一瞬。圧倒的な力の使い手の前に猛と真由子はなす術もなかった。

「なんだよ、もう終わりか？威勢良く向かってきたわりにはあっけなかったねえ」

「く、くそつ。あゆみはぜってえ渡さないぞ」

猛は男の足首を掴む。男がナイフで猛の手の甲を切ると、その痛さゆえに猛はうろたえた。

「なあどうする？力を使える人間だぜ。おまけに俺らのことを知られちまった」

「ほうつておけ。どうせこいつらには何もできやしない。それにボスはお嬢ちゃんだけさらって来いと言われたんだ。余計なことをする必要はないだろう」

「だな。さつさと連れ帰って報酬もらおうぜ」

男たちがあゆみに近づいたとき、真由子が男の一人のバックに手をかけた。

「このアマ。まだそんな力が残ってやがったか」

真由子は男に足蹴にされた。

「いやっ」

抵抗もむなしく、男たちはあゆみを殴って気絶させると、闇夜の中に消えていった。男たちが消えると時間は再び動き出した。連れ去られた跡には彼女の携帯電話と猛にあげるはずだったペンダントだけが落ちていたのだ。

第十章

第十章 一致団結

翌日。真由子の力により体力だけは回復した猛と真由子にはいつもの表情はない。あゆみが誘拐された。それは紛れもない事実だった。もうかれこれ二十分は経とうというのに、2人は黙ったまま紅茶をすする音と周りの雑音だけが鳴り響いていた。

カランコランツ。誰かが店に入ってきたようだ。何の会話の進展も見出せない猛は思わず誰が入ってきたのかを見てしまった。

「よっ」

そう気楽に猛に声をかけたのは何と洋平だった。衛と翔太と吹雪もいる。猛は一瞬あっけに取られて何がなんだかわからなかった。

「そっだ、昨日、洋平にだけはあゆみが連れ去られたことを話したんだ。でも何で？」。猛は動揺して呆然としていた。

「どうしたんだよ？そんな辛気臭え顔して」

「あー、あれでしょ？あゆみがいなくなったから落ち込んでんでしょ？」

「ゲンキダシテください」

「みんな……。でもどうしてここに？」

「俺が話したんだよ。真由子さんには話すなって言われてたけど、高崎が誘拐されたとあっちゃあ黙ってられないだろ？」

「みんな……」

「なあ真由子さん、俺らにもわかりやすいように力のこと、今までのことを教えてくれねえか？俺も詳しくは知らねえしな」

「そっね。こうなった以上、君たちにも協力してもらっしかないわね」

猛はみんなの気持ちが嬉しかった。長年連れ添った大切な親友。

一致団結して立ち向かいたい。もうこれ以上犠牲は増やせない。あゆみや若林君を救い出し、犯罪組織を撲滅する。猛たちに残された道はただひとつ、それしか残されていなかったのだ。

真由子はこれまでのいきさつ、力の使い方を全て話した。みんなが力を使えるように、猛のときと同じく掌に力を解放した。

「さ、これで話はおしまい。これから犯人グループのアジトに向かおうと思うけど、準備はいい？」

「アジト？どこにあるかわかってるんですか？」

「ええ、これよ」

真由子は犯人のバックに発信機をつけていたのだ。パソコンの画面に映る赤く点灯した先にあゆみがいる。猛たちは力を温存するため、電車をつないで犯人のアジトへと向かった。

一時間半後。犯人グループのアジトは今使われていない山奥の廃墟にあった。

「何かいかにもって感じだな。本当に人なんているのかよ？」

「ここは確か借金で潰れた中小企業の社長の家だったんだよな？3年前に夜逃げしたとか何とか・・・」

「そうよ、よく知ってるわね」

「ええまあ、自称情報屋だからね」

「そんなことより早く中入ろうよ」

「ああ」

中に入ると想像を絶するような光景が飛び込んできた。人の腕をもぎ取ったものや人間の剥製、臓器。どうやらこうやって人間を加工し、売買している秘密結社のようなだった。

「すげえな、見てるだけで胸糞悪くなるぜ」

「本当。こんな組織が存在すること自体、やばいよね」

「早くしないとあゆみも危ないってことか」

「そういうことになるんでしょね。今のところ横浜のときの人身売買組織と同類って見るのが正しい見解だわ」

「急ぎましょう。こうしている間にも高崎さんの命が危ないかもしれない」
「そうだな」

まっすぐ先を進んでいく。人気ひとつない。本当にあゆみはここにいるのか？疑いも深まってきたころ階段を発見した。

「この上が怪しいわね」
「そうだな。とつと登って高崎のところに急ごうぜ」
「・・・待って」

吹雪の静止とともに上から板が階段入り口に落ちてきた。吹雪の静止のおかげで猛たちは運良くダメージを逃れた。

「ちっ、ダメだったか」
「もつと計算して仕掛けておくべきだったな」
「てめえら！」

上から板とともに颯爽と現れたのはあの時あゆみをさらっていった3人の男たちだった。

「ん、どこぞのネズミが潜り込んだかと思えば、昨日のガキとアマじゃねえか。のこのことお仲間連れて友達助けに来たってか？泣かせるねえ」

「あゆみを返せ！」
猛は男たちに叫んだ。

「それはできねえな。昨日言わなかったっけか？俺たちやあボスに金貰って雇われてるってよ」

「悪人はみんな同じこと言うのね。あなたたちを倒さなきゃ通してくれないって筋書き。もうそのパターンは見飽きたわ」

「へ、何とでも言え。昨日、あれだけこてんぱんに伸してやったのにまだ凝りねえようだな。今回は手加減しねえぞ」

男たちが動き出した瞬間、吹雪と衛と翔太が真っ先に飛び出した。3人が力を使い、男たちに殴りかかる。さらに真由子と猛と洋平は3人が勝てるようお願いをこめて力を放出する。

みんなの力がうまく連携されたパワーに男たちは敵ではなかった。元々吹雪たちに素質があったことも手伝って、前日にあれほどあった力の差を逆転していた。男たちは完全に伸びてしまっている。

「さあ、先を急ぎましょう」

男たちを破った猛たちは階段を駆け上がる。そしてついにボスの待つ部屋、踊り場へと辿り着いた。

ガチャガチャツ。古い廃墟のためか鍵が壊れてしまっている。

「どうする？力を使えば簡単に開きそうだけど・・・」

「いや、ここは力を温存した方がいいです。洋平君！」

「ああ、わかつてる。せーの！」

ドバンツ。翔太と洋平は古びたドアをぶち破った。中は薄暗い煙で覆われていて様子はわからない。しかしそこには間違いなく誰かがいた。シルエットしかわからないが、おそらくこいつがボスなんだろう。

「おい、お前がこの組織のボスだな。あゆみをどこへやった！」

「くくくくく・・・。よくここまで辿り着いたね。そこはほめてあげてもいいだろう」

「そ、その声・・・もしかして！」

その声の主にはどこかで聞き覚えがあった。そうそれは猛たちには馴染みの深い人物だったのだ。

「若林君・・・あんただったのか！」

「ご名答。僕が生徒会長にして秘密結社『メシア』のボス、若林賢だ」

「！」

どうしてなのかわからなかった。短い間だったが、若林はいい奴だと思っていた。たしかに猛たちとは違う堅い奴というイメージはあったが、猛たちの仲間だとずっと思ってきた。なのになぜ？猛たちは動揺を隠しきれなかった。

「私たちを騙してあゆみちゃんをさらうチャンスを窺っていたと

いうわけね。自分も連れ去られたように見せかけて、本当は裏で自分の思い通りの世界を作ろうとしていた。頭が切れて独特の思想を持つあなたの考えそうなことね」

「真由子さんは本当に鋭い観察力をお持ちですね。どうです、僕と一緒に理想の世界を作り上げていきませんか？依然言つてたでしよう？誰もが願いの叶う理想の世界を作りたいって。僕と真由子さんならきつとその理想に叶う世界は作っていける」

「・・・それはご免ね。あなたみたいな男と一緒になんか作り上げたくないわ。あなたの作ろうとしている世界は欲望そのままに何でも思い通りになるだけのもの。そんなの動物と変わらないわ。」

それに今回の一件でわかったの。願いは叶えてもらうものじゃない、自分で努力して叶えるものだってね」

「本当にそれでいいのか？今言ってることは力を否定するってことなんだよ。真由子さんは力なしで生きていけるといふのか？力がないと大変なことになるのはあなたが一番よくわかってるはずだろう？」

「・・・ええ、後悔はないわ。それが宿命だものね」

猛たちは何のことかわからないまま若林の顔をずっと睨んでいた。若林は猛の視線に目をやると、少しの沈黙の後、しゃべりだした。

「・・・そうそう。話がそれてしまったけど、高崎さんのことでも来たんだつたね。まあ正確に言えばさっきからこの場にいるんだが・・・」

「何？どこだ、どこにいる」

「見やすいようにしてあげるよ、ほら」

突風が若林の身体から放出される。猛たちは飛ばされぬよう目をかすめながら凌いでいる。部屋にかかっていた煙が徐々に吹き飛んでいく。

風邪が吹き止んで猛が目を開け前を見ると、あゆみの姿が浮かび

上がった。ガラス張りのケースの中に入れてある。裸で鎖につながれた彼女には、体中に輸血のときの管のようなものが巻かれていた。ドス黒い光とともに、もがき苦しんでいる彼女の表情が痛々しく感じた。

「あゆみ！」

猛の声に反応するかのように彼女の口は何かをしゃべっているように見えるが、こちらには聞こえない。

「無駄だよ、君たちの声はあちらに聞こえても彼女の声は届かない」

「あゆみを・・・彼女をどうするつもりだ？外にあつたのみたいに剥製にして売り飛ばすのか？」

「おそらくそうするだろうね。それが普通の人間なら・・・」

「普通の人間なら？どういう意味だ？」

「彼女は異常に高い『GOD OF DESIRE』の潜在能力の持ち主だ。彼女の力を自分のものにすれば理想の世界の実現に近づく。そのために彼女をさらってきた。真由子さん、あなたは本当は気付いていたんだろう？気付いていながら仲間に加えなかった。違うかい？」

「・・・・・・・・」

真由子は少し黙って猛たちの顔色を窺った。一回頷いてから再び口を開く。

「そう、気付いていたけど彼女を危険な目には遭わせたくなかった。それに、あれだけの力は暴走を起こしかねない。彼女にとても制御できるだけの肉体が備わっているとは言えなかったからね」

「そう、高崎あゆみの力はかつて天才といわれたゲーテやケネディ大統領、アインシュタインらに匹敵するもの。彼らは願いに耐えられるほどの力量と天性の素質を持っていた。彼女には力量が足りないうために、もし力を使えば自分の意に反することにまで範囲が及んでしまい収拾がつかなくなる。それを真由子さんは恐れていた」

「能書きはそれぐらいにして、高崎をどうするつもりなんだ？」

「・・・ゲームをしよう。あの装置は彼女が僕に力を注ぐようにできている。戦いを始めれば自然と僕に注がれ、それと同時に彼女は衰弱していく。僕が戦闘モードを解除すれば彼女は助かり、長引けば彼女の命は保障しない。さあゲームの始まりだ」

第十一章

第十一章 最終決戦

バトルが始まった。あゆみを守るため、若林の思い通りにさせないための最終決戦が。護衛の男たちるときと同様に吹雪と衛と翔太が飛び込み、真由子と猛と洋平が援護射撃をする。3人に注意が向いたのを見計らって、洋平が時間差で若林の懐に入る。

しかし若林の圧倒的な力の前に吹雪、衛、翔太の3人は一撃で吹き飛び、洋平の攻撃もはじかれてしまった。

「大丈夫か、洋平？」

「ああ。でも吹雪たちが・・・」

吹雪と衛と翔太は腹部にダメージを受け立ち上がれない。真由子が3人に寄り、怪我の確認をする。

「・・・だめね。命に問題はないんだけど、もう動ける状態じゃないわ」

「くそつ、強すぎる。まるで力が効かない」

「俺たちと組んでたときは力を隠してたってことか」

「ふふつ、それはちよつと違うね」

「!どういうことだ？」

「僕は力を使つて闘うたびに相手の力を吸収してきた。そう、生島君の力もね。もちろん今も彼女の力とともに君たちの力も僕にどんどん注ぎ込まれている。ま、彼女は特別力が大きいから一気に吸収できるような装置に入れてるんだけどね」

猛たちには確かに若林に力が注がれているのがわかった。徐々に力が抜けていく感じた。後ろにはやつれ細って徐々に老婆のような白髪から抜け毛に変わっていくあゆみの姿があった。

「どうあがいても君たちに勝ち目はない。諦めたらどうなんだ？彼

女一人の犠牲でその他大勢の思い通りの世界が出来上がるんだぞ。

人は誰もが欲望を追い求め、叶えたいと願う。恋人が欲しい、きれいになりたい、お金が欲しい、出世したい、遊びたい、健康でありたい、エッチしたい、おいしいものを食べたい、勉強したい……。満たされなければ逸脱行動を取り、反逆を起こす。そんな醜い生き物なんだよ。そこにいる真由子さんも言ってたじゃないか。もちろん君たちもその住人だ。どうだ、悪くない話だろ？」

「……………」

真由子が黙っていると、猛が横から入った。

「へ、そんなのまっぴらごめんだな。お前の作るうとして世界はただの虚構の世界に過ぎない。確かに人間は欲望を追い求め、満たさそうとするかもしれない。戦争や醜い争いが絶えず下等な生物かもしれない。だけど、俺たちは必死に生きてるんだ。俺たちの欲望は自分のためだけに抱いているわけじゃない。誰かのために、誰かを守るために抱いてるんだ。お前のように自分の私利私欲のためだけに使おうという奴にこの世界を握らせるわけにはいかない」

猛が洋平と真由子の目を見ると、2人は頷いた。

「そう、私も猛君と今は同じ気持ち。私の考えは間違っていた。誰もが思い通りになる世界なんて創っちゃいけないだわ。人が生き続ける限りずっと。私が最初にこの力に気付いたとき、これでやっ」と世界中の人々に幸せが訪れると思った。でもそれは違った。人は誰かのことを思い、好きになった相手を守ろうとするとき願いが叶う。そのことを猛君たちに教わった。もう私は逃げない」

「そうだ、俺たちは今目の前にいるあゆみ、そして人々の希望を失わせないためにもお前を倒さなきゃならない」

「…………それが君たちの答えか。やはり生かしておく価値はないようだな」

「行くぞ！」

猛たちは力の全てを込めて『GOD OF DESIRE』の力を若林にぶつけた。若林の圧倒的なパワー対3人の心の絆。激しいぶ

つまりあい角の戦いを演じる。

「ばかなっ、あれほどまでにこちらの優勢が決まっていたはずなのに・・・お前らの体力は僕に吸い取られて残り少ないはず」

「何でも力で何とかなると思ってるお前にはわからねえだろうな。俺たちの絆の強さが！」

「何っ？」

若林はどこからともなく3人に力が集まっているのを感じ取っていた。なにやら声がある。気絶した吹雪と衛と翔太の声だ。さらに声が集まってくる。難波、生島、あゆみ・・・。猛たちともに戦った仲間たちの「頑張れ！」という声が猛たちの背中に力を加える。

「ああああ・・・！！」

「これでわかっただろ？お前のやろうとしていることはただの自己満足なんだよ。守ろうとする人が俺たちにはたくさんいる。だからこそ強くなれる。ま、親友一人いないお前なんかにはわからねえだろうがな。何でも金や力で解決しようとするお前には」

「絆だと？ふざけるな。人間など・・・、人間など私利私欲のために裏切るものにすぎな・・・、う、ウオーーーーー！！！」

若林はまぶゆい光を発し、煙とともに姿を消した。力により消滅したのだ。そう、まるで閃光のように。

「勝ったのか？」

「どうやらそのようね。彼の生命反応が消えたわ」

「でもよ、最後はあいつも可愛そうな奴だったよな。人を信じたことがなかったんだろうな、きつと」

「そうね。結局自分自身が犯罪に手を染めることで理想の世界を創ろうとした。自分だけを信じてくれる理想郷をね」

「とにかくあゆみを助け出して、こんなところ早く出よう」

「そうだな」

猛たちは若林の遺した煙を掻き分けながら装置へと向かった。戦

いのダメージで足を引きずりながらも。しかし装置の中にはあゆみの姿はなかった。

「どういうこと？もしかして消滅しちゃったっていうの？」

「・・・そんな・・・。あゆみ、あゆみー！ー！！！」

ポカーンッ。後ろで何か爆発する音がした。見る見るうちに煙が引いていく。猛たちはすぐさま目をやった。すると中から真っ黒で強靭な肉体に悪魔のような翼の生えた若林が姿を現した。

「どういうことだ？消滅したんじゃないのか？」

「ガLLLLLLLL・・・！！！！」

「・・・待つて！何か様子が変だわ」

若林は洋平に向かって鋭い爪を武器に突進してきた。洋平は動けずもろに若林の直撃を受けた。

「うわあああ！！！」

洋平はもがき苦しんでいる。猛と真由子は間合いを取った。

「どうやら力に取り憑かれて理性をなくしてるみたいね。あゆみちゃんやみんなの力を吸って力を制御できずに暴走し始めたんだわ」

「どうすりゃいいんだよ。あんな化け物俺たちで勝てるのか？」

「わからない。でも今は闘うしかないわ。理性をなくせば動物と一緒。動きは単調なはずよ。必ず隙があるはずだわ」

「おし」

若林は素早い攻撃で2人に襲い掛かる。猛と真由子はぎりぎりのラインで攻撃をかわし、「気絶しろ」と願いをこめて力をぶつける。しかし攻撃は一向に効かない。

「強すぎる。多くの力を吸収しているから理性を失ってもその力は巨大だわ。おまけに力が全て無効化されてる」

「なあ、力を使って若林を元に戻すとか時間をさかのぼらせるとかできねえのか？」

「それは無理ね。私も過去に戻りたいと思って同じことを考えたことがあったわ。でも自然の摂理に逆らうことはできないみたい。その日一日中力が使えないどころか、寝込む羽目になったわ。最も彼

みたいに莫大な力があれば別でしょうけどね」

「そうなのか……。我ながらいい案だと思ったんだけどな。やっぱり俺たちでどうにかするしかねえか」

「そうね。だけでももう私たちの力も残り少ない。いくらなんでもあと1回が限度ね」

「よし、その1回に賭けよう」

猛と真由子は若林に正面から向かっていく。若林が腕を振り上げたとき片手で腕を跳ね除け、脳に力を注ぎこんだ。2人の力が頭脳に障害を起こし、若林はもがき苦しんだ。

「やったか？」

その瞬間、若林から見えない腕が真由子に襲い掛かった。

「真由子さん！」

ほどなく猛にも見えない腕が襲い掛かる。2人は動けないほどのダメージを受け、地面に叩きつけられた。そして若林の腕に2人の首がつかまれ、徐々に絞められていく。

「くそっ、ここまでか」

「油断しちゃったわね」

次第に2人の口からは泡が吹き出し、もうだめかと諦めていたのだ。

しかしそのときだった。どこからともなく爆風が吹き荒れる。後ろに目をやると白くまぶしい閃光が輝いている。若林の腕がぶちきれ、猛と真由子は絞められた状態から解放される。パウダーのような粉が猛たちに降りかかる。それとともに見る見るうちに猛と真由子の力が回復していく。気絶していた吹雪と衛と翔太と洋平も傷が治り、立ち上がった。

「これは一体？」

「見てあれ」

吹雪の声に反応し、光の先を見ると白いヴェールを身にまとった、白い翼の生えた黄金に光るあゆみの姿があった。その姿はまるで天使のようだった。

「あゆみ！無事だったのか」

「・・・いいえ、確かに彼女は一度死んだわ。生き返ったのよ、極限状態に置かれることで」

「そうか、まるで不死鳥みたいだな。ま、何より生きててよかったじゃねえか」

「ああ、本当に」

「でも何か様子が変わよ？」

蘇ったあゆみは腕で若林の首を絞めている。

「！まずいわ。彼女、力が制御できずに暴走してるのかもしれない」「それじゃあ止めなきゃ」

「ええ」

猛たちは止めに入った。若林を失神させ、命を奪おうというまさに直前、猛はあゆみに向かって叫んだ。

「あゆみ、やめろ！」

「た・・・け・・・る？」

彼女はその言葉とともに光を失っていく。黄金の光も背中に生えた翼も徐々に退化していく。猛が彼女の身体を抱きかかえると彼女は正気に戻った。

「大丈夫か？」

「・・・猛、助けに来てくれたんだね」

「ああ。さ、一緒に帰ろ」

「・・・うん。その前にちょっといい？」

「あ、うん。何？」

その瞬間あゆみは猛にキスをした。さらに猛の目を見つめて一言「怖かった」。彼女は泣き叫び、しばらく2人は抱き合っていた。

戦いの終わった静けさの中、猛たちは若林の横たわる体を見た。

「どうする？このまま殺すか、それともほっておくか」

「殺す必要はないわ。力を使い切った人は力のことを全て忘れる。

難波さんがそうだったようにね」

「記憶をなくして、力をなくして、漸く普通の高校生に戻るってことか」

「こんな力、気付かない方がよかったのかもしれないな。力があるからこいつは自分の欲望のためにこんなことになっちまった」

「人は誰もが満たされたいと思って日々生きている。彼が気付かなくてもいずれ誰かが同じことをしていたのかもしれないわね。皮肉なものだわ。それも全て私のせい。私がみんなを巻き込んでしまった。本当に悪かったと思っっているわ」

「・・・、そんなことないよ真由子さん。俺たちは生きる意味を見出すことができた。無気力だった俺が真由子さんに出会って行動することで人間やる気になれば何だってできることがわかったんだ。それがわかっただけでも無駄じゃなかったって思ってる」

「・・・ありがとう」

「さ、帰ろうぜ。あゆみの親も心配してるだろうしよ」

「そうね」

猛たちは若林をその場に残し部屋をあとにする。階段を降り、行きに見た不気味な剥製の数々を通り過ぎ、廃墟を出た。

「もう朝か。ずいぶん長いことここにいたんだな」

「ああ。でも俺たちももうここに来ることはないだろう。これから普通の高校生として生きるんだ。目標を持って」

「なんだ、猛。お前将来の夢なんか持ってたのか？」

「ああ、たった今思いついた。それは真由子さんとも相談してみないとな」

「何それ。もしかしてそれ遠回しに私を振るってこと？」

「ち、違うよ。俺が好きなのはあゆみだけだって。ちょっと真由子さんもなんか言ってるよ。・・・まゆこさん？」

「う、いやああああ・・・。何で、何で今頃・・・。せつかく・・・。せつかくわかつたのに・・・」

真由子の表情に異変が起こる。ブチブチッ。彼女の服が破け、緑色の血管の浮き出た肌が露出する。真由子の額に第三の目が浮かび上

がり、顔も変形していく。全身に赤い毛が生え、覆われていった。

「真由子さん！」

「どうなってるんだ？これはもう人間の身体じゃねえぞ」

「若林みたいに暴走したんじゃないですか？」

「で、でもさつきみたいな光がでてないよ？」

「猛たちが怯んでいると、声がした。」

「・・・暴走じゃないわ、・・・私の中に住み着いたウイルスよ」

「真由子さん！大丈夫なんですか？」

「ええ・・・、何とか。醜い姿を見せてしまたわね。いつもはロングコートで肌を見せないように隠してたんだけど・・・」

「・・・、今言ってたウイルスって？」

「正確に言えば力の根源『デザイアウイルス』。全ての力の源がここに凝縮されている」

「デザイアウイルス？でもなんだってそんなもんが真由子さんの身体に寄生してるんだ？」

「・・・、私の力は生まれたとき親も恐れるほど巨大だった。それゆえに私の先祖が封印したこれを私の身体に埋め込むことで反発させて力を制御していたのよ。埋め込むときに両親は力を使いすぎて記憶をなくしちゃったけど。今まではウイルスが私の力を押さえつけることで何とかなってたんだけど、もう限界みたいね。力がウイルスをコントロールして私の身体を乗っ取るうとしているみたい」

「そ、そんな。それじゃあどうすれば・・・」

「・・・お願い、私に全部の力をぶつけて」

「！」

「猛たちは耳を疑った。そこへあゆみが前に出る。」

「そんなことしたら真由子さんはどうなるの？」

「・・・、多分私の存在はなくなるでしょうね。ウイルスを消せば力に気付いていた全ての人たちの記憶は消される。私がいなくなってもあなたたちが悲しむことはないわ」

「でも！」

「やって、お願い。私の理性がきくうちに。早く！私が若林君のよ
うに世界を支配してもいいの？」

「・・・くっ、くっそー！」

猛は真由子に向けて「消えてくれ」と願いを力にこめる。洋平に吹
雪に衛に翔太も顔を背けながらそれに続く。しかしあまりに巨大な
力の根源に猛たちの力は次第に押されていく。

「くそっ、力が足りない」

「どうするの？このままじゃ私たちがやられちゃうんじゃないよ・・・」

「・・・。あゆみ、力を貸してくれるか？」

「！」

猛は猛の後ろで怯えながら見守っている彼女の顔を見た。

「でも、私・・・」

「大丈夫、もし暴走しそうになっても俺があゆみを守るから」

「でも・・・、私にはできない、できないよ。真由子さんを殺すこ
となんて」

「・・・。あゆみ、俺たちは何のために闘ってきたんだ？欲望のま
まに生きることを否定するために闘ってきたんだろ？俺たちだって
苦しいんだ。だけど、真由子さんはもつと苦しいはずだ。今までこ
んなでつかい忌まわしと戦ってきたんだ。このまま俺たちを殺し、
欲望のままの世界を創り上げたら彼女はどうなる？俺たちで止めな
きゃいけないんだ。俺たちのためにも、彼女のためにも」

あゆみはうるうるした瞳で猛の目を見つめる。

「あゆみ！」

「・・・わかった、そうだよ。ごめん、心配かけて。一緒に終わ
らせよう、この戦いを」

「ああ。終わったらいっぱいデートしような」

「うん。その約束、忘れないだよ」

あゆみは願いをこめた。黄金の光が彼女の身体を包む。猛が片手
で彼女の肩を支える。あゆみの力とみんなの力が加わった『GOD

OF DESIRE』の光は真由子の身体を浸食していくウィルス
の動きを停止する。

全身を覆う赤い毛、額に浮かぶ第三の目、緑色の皮膚が浄化され、
真由子本人の白くきれいな肌が露出する。全ての力を真由子の身体
は受け止め、その場で彼女は倒れた。

「真由子さん！」

猛たちは彼女に寄り、声をかける。彼女の身体はうつすら透けて消
えかけている。

「・・・やつと、全てが終わったわね。ありがとう、みんな」

「真由子さん！」

「・・・私の存在はもうじき消える。人々の力の記憶は消え、全て
いつもの日常に戻るわ。今までありがとう、私のわがままに付き合
ってくれて」

猛たちは消えかける真由子の顔を見て泣いていた。出会ったこと、
歩んだこと、その全てを受け止めて。後悔をするものなど一人もい
なかった。

「・・・猛君には謝らなきゃね。私の欲望のためにあなたの目の前に
現れ、力を解放してしまった。そのせいでこんなことになってしま
った。本当にごめんなさい」

「そ、そんなこと言わないでくれ。さっきも言ったじゃないか。俺
は真由子さんと出会うことで生きる希望を手に入れたって」

「そうだけ。理由はどうあるうと真由子さんは欲望の本当の意味に
気づき、欲望に取り憑かれた若林を倒すために一緒に闘った。それ
でよかったじゃねえか」

「そうだよ。真由子さんは一生懸命闘った。自分が犠牲になってま
で。私にはできない、すごいことだよ」

「ありがとう。私も・・・あなたたちに出会えて・・・よかった・・・」

その言葉に安心したのか、真由子は笑顔で消えていった。

「これでよかったのよね？力の存在を知らない方が人のためにいい

「ことなんだよね？」

吹雪の問いかけに猛たちは頷いた。

「そう、これでよかったんだ。欲望なんてすぐに叶わない方がいい。自分のために願うよりも誰かのために必死に願うことが幸せなんだから。こんな力、自由に使えていいわけないんだ」

真由子の消えた痕から不思議な潮流が流れる。猛たちの力の記憶は次第に消えていく。そう、日の出が昇るとともに新しい誰かのために生きる未来を信じる明日の幕開けとして。

第十二章

第十二章 エピローグ

あれから7年の月日が流れた。今日は十二月二十五日。クリスマスだ。

「ほら猛、急がないと」

「ああ、ちよつと待って。今、事務所閉めるから」

「もう、久しぶりにみんなに会うっていうのにとろいんだから」

「お前の方こそ、結婚してからきつくなったんじゃねえか？」

「ん、猛、なんか言った？」

「・・・いえ、何でも」

あれから猛とあゆみは結婚した。大学を出てすぐのことだった。法学部で培った知識を生かし、今は小さな探偵事務所を2人で経営している。一週間に数件の調査依頼が来る程度だったが何とかうまくやっている。あのときのことだけすっかり記憶にない。誰か大切な人を失ったこと。ただそれだけが記憶の片隅に住み着いていた。

「よう、ひつさしぶりだなー」

「元気してた？って言っても一年前に結婚式であってるんだけど・・・」

「お久しぶりです、猛君にあゆみさん」

「おう。洋平に吹雪に翔太じゃんか、久しぶり。・・・あれ、衛は？」

「あ、あいつは後で遅れてくるってさ。何でも彼女とデートだと」

「へー、あいつもついに彼女できたのか？」

「あー、しかも見たら驚くぜ。なんてったって俺たちがよく知ってる奴でさ・・・」

「えっ？俺らが知ってる奴でほかに女子なんかいたっけ？」

「ガランコランッ。そう言っている傍から誰かが店に入ってきた。」

「お、噂をすればなんとやらだ」

「ああ、猛だ。ひっさしぶりー！」

「その声、その顔は！」

「難波さん？」

思わずあゆみと猛は声をそろえて口に出してしまった。パーマがかつたショートヘアにすっかり美白になった姿は昔とはずいぶん雰囲気が違うものの、紛れもなくそれは難波愛その人だった。

「驚いたー。まさか衛と難波が付き合ってるとはな」

「へへ・・・」

「衛、私が入院してること知ってずっと見舞いに来てくれたんだ。最初は相手にしてなかったんだけど、段々と優しいところあるなーって思っで・・・」

「大学に入って告白したら即OKってわけさ」

「おめでどう」

「しっかし、結構集まるもんだな。高校卒業してからもう5年だぜ。それが猛たちの結婚式、そして今回・・・集まらなかったのは引越した生島先輩だけか」

「それだけ私たちの絆は強いつてことだよ。みんながみんなのためと一緒にいたいと思う。それって一番大事なことなんじゃないかな？」

「だな。何か前にも同じこと聞いた気もするけど・・・」

「なんだ、猛もか？俺もそう思ってたところなんだよ」

「私も。何だかとても懐かしいよね」

「うん。何かこの喫茶店でいろいろあったような・・・」

「でも7年前のことだけなぜか思い出せねえんだよな」

「ま、いいじゃねえか。細かいこと気にしねえで。久々にあったんだ、積もる話があるんだろ？洋平、お前は今何やってんだよ？」

「俺は・・・、今コンピ्यूタ会社で働いてんだ。もう少少で係長

に昇進しそうなんだ。そうしたら吹雪と今後のこと……」

「え、お前らまだ続いてたんだ？」

「余計なお世話だよ。そういう衛こそどうなんだよ？お前実家の本屋継いでんだろ？経営やばいらしいじゃん。難波と結婚する気はあるのかよ？」

「だ、大丈夫だよ。俺は絶対愛ちゃんを幸せにする。幸せにしてみせるよ」

「衛……。私も一生ついていくよ」

「愛ちゃん……」

「……。猛たちはどうするんだ？あゆみのおなかの中には赤ちゃんがいるんだろ？」

「ああ。俺はこれからあゆみとおなかの子どもを支えていく。みんなの幸せを願って。な、真由子……」

猛はそう呼びかけてあゆみのおなかに手を当てた。

幸せって何だろう？人は自分のためだけに願うんじゃない。誰か大切な人を守るために幸せを願うのだ。欲望と理性の狭間で本当にそれがいいことなのかと悩む。思い通りに何でも願う世界ならそんな悩みなんかないだろう。でも幸せの形はひとつじゃない。人の数だけあるのだ。それこそ星の数ほど。

思いを形にすること。それこそが生きるということだ。人間はそれをやめてしまったら生きる希望を失う。進化をやめた生物はやがて退化へと向かうことになる。

人が人として生きる限り思い通りになる世界なんて創っちゃいけないんだ。猛がふとガラス越しに外を見ると七色の虹が架かっていた。日差しあたる晴れ渡る空は未来への希望を覗かせていた。

T H E E N D

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8662i/>

GOD OF DESIRE

2010年10月20日07時30分発行